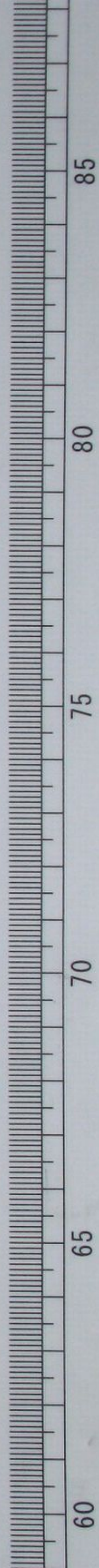


煙霞小景

卷一

特別
イ 4
3152
42



14
3152
42



95-61

烟霞小景



卷壹



叙

游一耳。或觀山川湖海之勝。或吊黍離麥秀之墟。或覽
宮殿樓閣之美。或視人物文章之秀。余性喜遊。足跡既
遍天下。其於歷游。皆有詠詠。此卷即是也。或以泉
石膏盲。煙霞痼疾。眷戀風光。拋擲世務。為嫌也。然余杖
屐跋涉之間。心融形釋。常覺與萬化冥合也。僅所謂神
遊于宇宙者。非邪。余自信者。遊之非徒然也。嗚呼。寬閑
之野。廣莫之鄉。彷徨適寤。窮至道之妙。閑送一生。樂亦



有餘矣。昔人又有與余同趣者。余獨何病焉。唯余才薄
識劣。未能盡發天地淑靈之秘。鄙心深愧焉。故自誌聊
有所興起云。 明治丙申六月下澣。 天隨自識。



有欲其者人又有與余同趣者余獨何病焉唯在才薄
識劣未能盡發天地淑靈之秘鄙心深愧馬坡自誌聊
有以興起云 明治丙申六月下澣 天隨自識

不二世為根 惡緣

人生到處知何似。

恰似飛鴻踏雪泥。

泥上偶然留爪指。

鴻飛何復辨東西。

煙霞小景正成，偶讀東坡詩句，感慨不

禁，遂書以代題詞。

天隨。

按義淨撰慧琳西域求法高僧傳音義云烟
考聲云火之烟也薰氣也按此烟非烟也遠
望山及天色凝似烟也僧傳云魚烟霞者逸
志雲林心遊物外也

凡例

一文章家日子を排し行を記するもの東漢の馬第伯封禪
儀記に始まり唐の李習之の南行記宋の歐陽修の後
志より山程水驛の次第を書し遂に文家の一體を要
するに修史の編年體と同じ余思へらく一個人の紀行は一國
の歴史の如く複雑なるものに非ざらん自ら段落の截然たる
もの有り故に記事本末體を用ふべし閱覽中大に便を覺
ふべし橋南谿の東西遊記の如き是なり余はこゝに兩者を
合併し南谿を倣ひて大題目によりて今其半に於て日子
を排し時の次序を追ふ

一余が行旅に在り常に小冊を懐にし事物を視聽見聞する毎に極めて簡略なる記述を作り以て後日の遺忘に備ふ今此稿を起すに方り是を基本とし他書を欠致し敷行廊張して詳細精密を期す唯廻國初游の篇は此所要なる記録を失ひ止むを得ず將に減へんとす記憶より尋攷し漸く綴り合せしを以て遺漏頗る多く記事完備せぬとす

一此書倉卒煩忙中に成しを以て改竄添削する暇日なく文章頗る甚雑漢語所雜辭所必言所新成の熟字有り恰錦繡繚繞を剪裁し一概して之を縫

入るべきは於て余必し之を
かりしにす

合しと云ふが如し無鹽の醜なる脂粉を以て掩ひ難く偶々麗しが輝き散はる萬人皆易先之固より専門以外の餘事はて敢て教を大方を請はん爲すは一己の珍として藏するに過ぎざらんばまこと甚い力を用ひず若し獲貶する者何れ俱し余が當行の本色を知らざる者にして聊か以て我が里を以て足らば余は揚言して止まらぬ山水を記して柳州の奇なく煙霞を描きて南谿の妙はし嗚呼我を我我たるを唯我は其我たるに安んず

一縁起繪畫の麁惡見ら堪へざる者と雖も余が實際其地にて得しものなれば杖笻跋涉の紀念として充分價

値りをも疑はぐ序文及書畫の者は同輩友人の好意以て寄贈せしむに係る好個の金蘭世傳、善觀、飽等、且取珍とすべし

一詩俳の類一切挿文共に別冊に載す凡そ事物皆本来の相系すべし也

一此稿を起す三月四日を以て日に五葉を課す四月より五月迄行軍及旅行量り継続せしむを恐れ爾後一日平均十五葉を課し退勉情が漸く今日を以て了す

明治二十九年申年五月十五日

天隨

附記

一余と癖を同じふ者此書を見んと欲すに於ては余は惜まば拒まらざるに其意を任すべし

一呂不季の書を著せし一字を改むる者には自ら筆を與ふべしといふことあり此書校正せしむるを以て誤字は字に造るにせよ、衍字等頗る多し若し之を指摘改竄する者は感謝の外なし

一批評題後の如き尤も可なり

天隨再識

煙霞小景 總目次

- | | | | | | | |
|-----|-------|------|------|------|-----|------|
| 第七 | 第六 | 第五 | 第四 | 第三 | 第二 | 第一 |
| 避禮記 | 十五國游記 | 雪汁紀行 | 磐雲陸雨 | 迴國初遊 | 初迺旅 | 幻境小記 |

第八

平泉紀行

第九

肘雲紀行

第十

一句一蹶迺記

第十一

西游小記

第十二

關北迺雪

第十三

北征日乘

第十四

若松紀行

第十五

瀨夢錄

煙霞小景 第一卷

第一、幻境小記

五十三次

土州

京阪

橫濱

鎌倉

江島

第二、初の旅

金華山 山花衣

青根

第三、廻國初遊

奥州街道

金澤八景

大山

函根

不二の高根

三阪嶺

身延

丹仙峽

風流使者跡

後閑

茅四盤雲陸雨

駒嶺

相馬

松川浦

阿武隈船橋

第五雪汁紀行

關山越

山寺

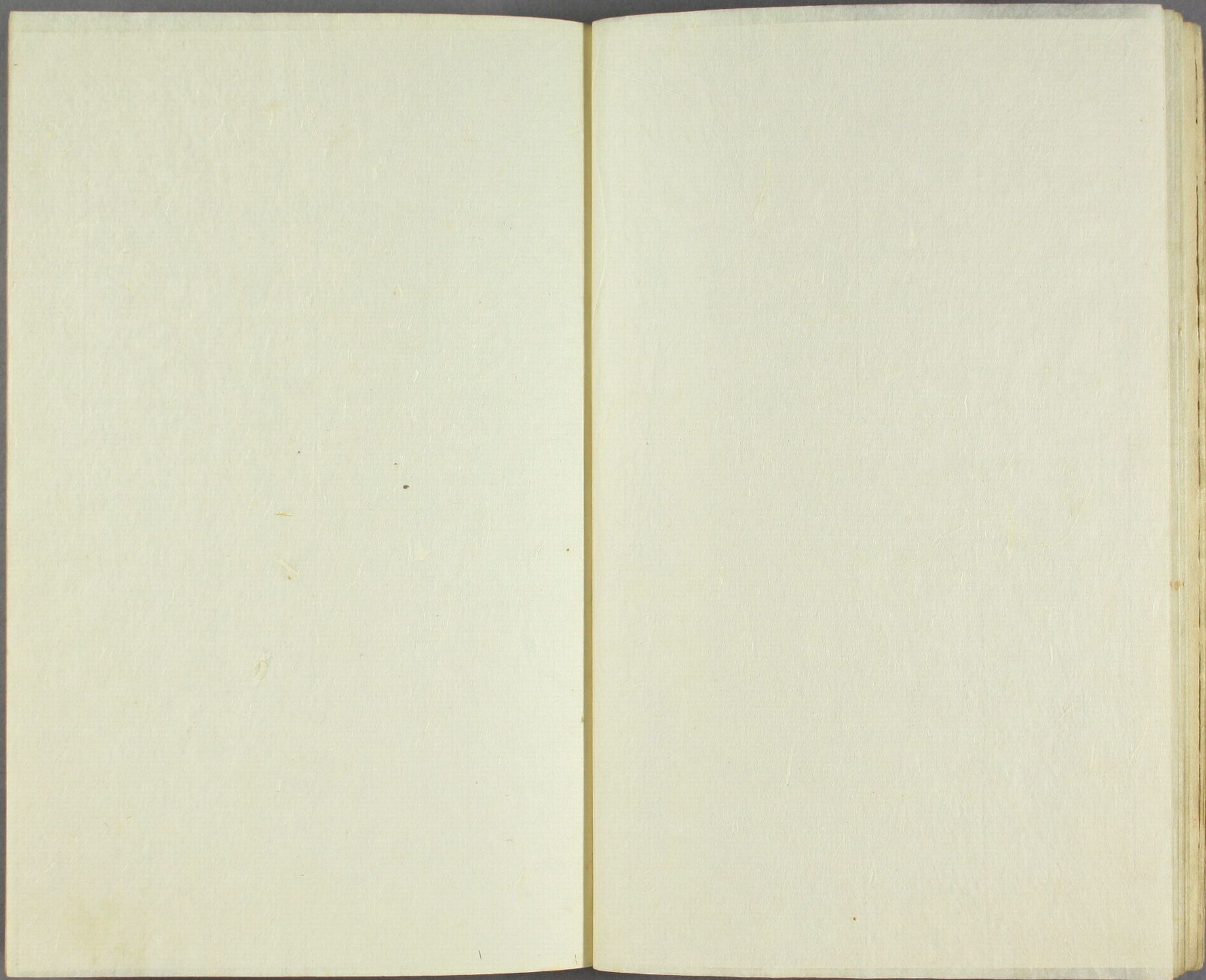
蝦夷穴居址

栗子嶺

文字摺

温泉巡り

大瀑



幻境小記

一五十三次

余が五歳の時、父は河内守家を舉げ、南海の赴くこと有り
て佳み馴れし女妻の都と改稱し、東海道を車馬を旅
せしこと有り、京都までは百千余里の途なり、此の句は
昔ぞし探覺の跡、すがら景色のよきは、いふまでもなきことながら、
の折余は何もに、おぼしきと言ひ申す、程たれど大方
は、余を打ち忘れ、十数年たつたに、龍氣を記し、
日降り平生夢寐の中、いほの見ゆる、幻境と云は、二ヶ所、
下は富士嶽、樹の影は、咲くも、雪を載せし、

若の糸朝のつらむに霞をを松並木の川より火をき
まほし言はれに今思を是れ午未松糸の何よりにや何れむ
他のは桑名の波し子ほしては大きかざる船の帆風子帆を揚
げて海を航せしさま実と快と笑ぬ舟中まを菓子せむ
れども人の詠をも見を採りし此幻景は常に余が胸臆中
に存し忘る暇をばなく余の生の経歴の品始のものにして明
かに少少感化を興へ余が性情趣味の老分は此知れぬして
起りて思ひし是れ殊に前者を於て然るもにして神州淑靈
の氣は余が無邪氣流に盛澤なり天真爛漫の五體を刺衝
し盡し今よりいづるまで富永の詩神を懐き林杪を張はせ也

三土州

左地を半月形をばし東西に長くと南北に短し東と北には
連山の峻嶒をも負ひ南と西は無邊の大洋に向す空は怪
岫の西岬は東西相對し其間を土佐沖と云ふ西岬を捕鯨船に
有る地也氣候殊よく夏は光く何れも夕暮りして
帆程風をばしむし何れも冬は何れもかして一般に綿衣
を用ふる也余が此三年の一回一回の降雪は七寸も及びず
七十年以来の大雪といへり米は二回の收穫なり密掛橙は茶
の類殊よく地は適す海は近して魚蝦の利なり鰹を以て舟に
老師の名は実を天下に冠しり次を君は鯛にして一年中常

に可價頗る廉其種類も又多し其他海魚猶多し皆其海に
博し故肉しき味尤も美なり河魚も之し如く鯉鰻なども
最も香魚又佳品なり牛肉鶏卵雞肉又廉價して野菜は
最も多しこれば最も佳みなり可といへり一は十五年の前のこと
なり今はいかにや

人情沈毅にして中に剛健の氣を合み一種風采神往然るも
似り價はして文少なく美觀見を勇む其特性として剛毅執
仁にしてや俗む風俗は節儉力行を以て殊に著しとし衣履
は共々奢侈を去り醬油も自宅を以て其糖は飯の菜
にして少し物を消費浪費するに非ず

評曰文章剛健
敬服
一はほれり其意一

好個の風俗史
以て日本風俗史
の款を補ふに足
る。

これは文化の進歩の傾向も一十五年の昔は東京
などよりの江尾と名株とら其言語に至りて古雅醇厚
を以て最も愛されし習慣の奇なる者數に残り余が記憶する
ものは①正月宵小兒女彩装を携へ群を以て各家を回り米
を乞ふ是は七草粥を乞はるなり②正月の半のことなるし
壯年の男子思ひの奇懐を以て各家を圍入し一番の滑稽
戲を演ずることなり③五月の節句の頃もやし新に男子を擧
げし家は大なる紙や鳥を揚ぐ紙鳥は所謂するめとてはして
東洋風の長方形のもの奴や鳥病などのものは更なるものは
疊二枚以上枚の大ききほて骨は皆丸竹にて四本半外

は用ひて以て疊み差くは巻きて藏むるを得し此時揚じり
は又特別して白色の紙を長きよりとて數十丈の長きまじり
るを尾道に処こみつゝ切てひろく河原に持ち行きて此揚
らした敷十條の尾は漸くより一奇觀なり此時河原に人群れ
たて長き竿を以て尾をくくりてちがひとるかして尾は書きた
りりぬらなり此竿は尾とく竿といひて其先に膏くにくらなり
五月節句の扱はかゝりて鯉職に立つることなし ④ 最も奇觀な
るは祭の山車なり高さ數十丈にして五層の六層位及び各層の
中に必す人形有りて東風山の山車を以て重ねたるが一つ
の山車と云ふなり 天神祭折かる山車数十台定て橋上を

聞て近年此祭は
心細くしつて
心細くしつて

わりやちまは舞臺を眺めたり或折ること一の山車が火を失ひて燃
へたり大騒動及びことなり ⑤ 国人大を愛養すること盛ん
にして大々といふことを行ふには村制をいふがも依然とし
て歌み隠地に山峡同行ひ強を黙許 流女なり大のよき
は二三百回を値し教人聯合して一匹を養ふるもし仕合の始ま
る前には番付をとりて頭の順序を定めたりかしこ期日ある
るに皆其地を養ふ余が見しものは吾皇山の奥の谷をとりて
処は一段高き所をとりて竹柵を以て之を圍み双方に柵を
こより行可は柵の上より角籠のを同じく上下をつけ軍配を
持ち聲をいせ双方を勵ます二匹大柵中に有りて高閣激戦

して涙み合ひ血淋漓として流るゝ其の弱けりて聲を擧げて悲
鳴する者も敗れ見物人は各其ひきの犬を勵まし其聲山若
子震ふ計りあり大し流石主人の意を知ると以て百剣を蒙る
所するになく血は體に凝りて白犬も赤犬もあつたゝ勝負付かざ
るもはしりし分は笑みし勝ちたるは高むし主は犬を擁して販
り大なる宴を會して酒宴を催ふし大を床の向ひ抱へ美味珍肴
を羞む勝ちたる大は意氣揚として躍り走り百負ける大はは
がを遺して涙を悲鳴しるるを悔しがり何るは年々疲れ息絶
ぬむ計りなきなり其様もあつたり此は信興行の前後湯屋敷
結床のことは其評判のみかたし

上佐の馬おたけしりま
ばしと坊さん銀か
やまきん
榮林子の戯曲
重井高白の冒頭
は日く夜さとい
い小字を金歩に縫
けせと云々。夜さ
こいといは元禄
より弘化は跨り
俗間に傳誦され
る小説の節の名
花の御江戸の西
國橋に押座す

⑤の婦を迎ふの家何時け可擧て行を見え車まが婦を迎ふ
時同じ⑦志て説遊遊にてはたはる朝も大盤の中央に置て之
は客に取らぬ事となくほんの飾り物もあつた⑧播磨屋橋の
坊さん叙はいなる事⑨房は下の句をよせよや今も劇部を之を行ふ
余の家はぬの中島町と云に河しが夜ち築屋敷と云父も移りぬ
高知市の南都もいふさ地はて前には桑田浜にさして河原連
たり鏡川の清流に抱絶え流余家の夜には十年つきの坂あり
又家は島石垣の上なり此川は一年に西三回流濫するを以て
のけ屋敷の門より出づなりハ幡の森は西にけり天満の廟は
東にけり前には潮江の岡連して袋風の如く山は夜は海を故天

が眼鏡を買ひ
は来た。按摩さん
が眼鏡を買ひ
のほよけれど、坊
さん。銀買ひに
来た。よさこい
よさこい。と。
末節の調太は
播磨屋橋云々
は相似たり、聊
所記して後勘に
備ふ。

と氣印子折む。怒涛、聲すまほしう。鏡川の中に一潭
あり、毎年必ず潜死する人あり、余は河を舟で遊ぶことを禁せ
れし折、行きて游泳し、髪を乾かしぬるる夜を待して歸り、生
憎は見付くべし。此の河より大水の出ず、時実、一快事にして、盤
に坐して、漕ぎまはり、遊ばぬ。舟より、勿論川の方々は激流濁限
逆巻く。執事、余が家の河より、は三河の隔たりたる故、此水満る
のみにて流るなり。此の事、世に得るなり。此河中には、鯉、鯉、鯉
たし、産し、釣遊して、一日を費せしこと、友に、何れ年のことを、此
大水、先きの時、余が学友某、なまの遊びに行きて、誤り水に陥り、溺
れし、向の海中の孤島に浮着し、孫も、母は無限の悲哀、相成

都里郷黨、同文際親密にして、團結するは、一種の美風なり。昔は
おれ、余が嬉遊する折も、東西兩都を始り、三千軒の家と同じ
年のほぞの子、世の有と世を、なげ、遊ひ、なげ、なげ、
近傍の、久勝、と、在、汲、江、瀧、五、屋、山、桂、宿、な、り、汲、江、は、錦
帯、橋、な、り、長、橋、瀧、を、横、き、り、架、し、風、趣、絶、佳、なり、五、屋、山
は、昔、は、室、海、の、靈、蹟、にして、汲、に、長、曾、我、部、及、城、阿、也、知、なり、桂
瀧、は、^東南、西、北、を、^西里、に、^東河、海、邊、の、風、光、殊、に、よ、く、最、も、觀、月、よ、し
又、小、浜、^東常、^西ふ、^東処、^西り、菅、公、左、遷、の、折、風、を、阻、ま、れ、こ、し、ば、し、舟、を
此、と、の、月、明、む、に、乘、り、琴、を、彈、せ、し、れ、と、地、也、^東城、也、も、大、か、
孫、と、規、模、考、を、し、天、長、節、の、時、也、は、天、皇、圖、上、に、御、真、影、を、懸、け

阿妹之と聞かば
泉下に在りて迎ふ

士民の登臨を許す所ありしを^其入の由人御真影を拜み聖
思の所より感して歌まじ寒錢まきし上けるに傍に守りたる查
心之を止め其れに及ばんといふもあかし 其他国中の名勝は
野根山仁徳山龍峯山等皆小学校とありしを地理書中
に何れを記懐する処のなり 七妹の差潮江山に何れ掃き
此より年来思を此にまれば才陽九廻せむも大好し西三年の故を
期し再び此地に遊此古屋を辰し徐に幼時の游跡を見更
に進んで過ぐる園中を巡覽すべし
そのむかしは神戶と浦元の間に航海するは浦元を一艘所し
南海の間に期り生れせしこと一度も遊し余が此地を去りて

東上す折も風と阻まれて旅宿淹留するに四五日に及ぶ
そは生れせしが船は荷を積む為に西渡崎と常に寄港し
の故東航に折し風雨を起り船体揺動するに甚しく眩暈
せざるのまはなかりし

十箇月有る年
此地に在りて
色も亦りて
奈神の如く
泉依りて感

余が此地に在りしは三年其回の悲歡はくもいへば此
記すは其の如くは唯だ風俗人情の如しをいへば
余の幼時の事なれば記懐の失せざるを得ず且つは十餘年
の昔に故を果して此をいへばは

三、京阪

土州を去りて京都来りたること其の(其回上巻にありし)大

阪堺を見物し神元より横濱へ航しに往來を定む。此年餘は
歳を以て故より少記に留る者なり。同内理學家清涼院の景萬
志壽寺。二條城。三條橋など大阪には阿彌陀池。天王寺住吉など
は歸郷して今に陣前に有り。神元より日津川河に詣て
祠及亂松の同水など沙河の長き堤の上を徘徊し今も
此頃より再遊し幻として實にむむ。折阿等し

四横濱

横濱に到ると五年。其塵業のまは同港場事と殊に
著しく見まき所を好し唯今少少時個中に有り。一段の佳
景を眺め脚心を慰めし所と云ふ左の三所を過すなり

本牧岬といふは横濱の南里に有り。海斗おして灣を扼す。一
岬角を懸崖直ちに波濤を吼らし巖上に老樹蟠屈し奇
壑跌宕の景象有り。屋總の山は近く目睫の間に有り。雲霧搖
曳し朝暉夕陰色彩百變す。濱上漁家點在し。風光盡の如し
野毛山は横濱市の西部に連なる丘陵。総稱して山や深
く高林山を蔽ひ幽邃之境を存す。富岳山は富面に有りて眺
望殊に壯快なり。余が花を采り鳥を捕りて遊びし此中なり。
五郎丸墳は市の西郭外に在り。監獄の前なる小山の東腹に有
り。此大さかやなる五輪塔の十年の昔をむしる。かや種考
證の末彼の五郎丸致を阿なり。五郎丸の墓をむしりて決

茂木と野澤は
要名目人なり
いづれか其一を削
るべし。

し四邊に塙をのりし前に丸木の鳥居をこころし余が家曾
こ此近傍に築せしは晩夏の夜など市に此邊より散りて
望依臺は神奈川大綱山上にあり高島屋家の別墅を境
内廣敷花卉草木を種假山水を造り庭に人工の精巧を集
む而して眺望は又一しまたして横濱の市、市牧の岬より生麦鶴
見の村を遠く連り一帯の海水を隔てて分總の山を望む園
は自由の人のふるまひ梅きく頃桜白ふ折をこ疎と賑や
余は道妙なる人とし此野中に寓せられし故折を来り遊
びし其地横濱には原茂木菊の野澤は自由の岬と野澤など
ふ豪商の別墅何れも規模風景共之に及ばず

五、かまくら

仙臺より来り前々鎌倉を遊びしと西三回よりその折は横濱に
線なり故大船より古くは行を途に土山の細かに列する建長園
覺書福寺などありをいふ八幡宮をいふ。

幡宮は狛狹岳の下にあり大石鳥居連り由井が澄みたる其間
十の筋あり正面向の方より来るとは紅白蓮池が来り石の神橋
を渡り神樂殿若信より頼朝を奉る白旗宮よりしりや
し静御前が舞殿あり其れより石階を登り其左側に大なる
銀杏樹あり公曉が潜むる寔朝を討ちし地なり上り路には
本社神像として壯麗雄偉人目を眩せしむる計なり杉木立

森して四邊を圍み白鳩餅を可きりて鳴く祠の名階を下り
右方に行ば小丘の半腹に頼朝、廣元の墓あり石室の中に立
つり其下には鳥津氏の先祖忠久の墓あり 又より猶大へ行くと
數軒鎌倉宮といふ

室官幣中社にして護良親王を齋祀し鳥居、窺は御筆
に係り明治三年創設せられたりして境内櫻樹紅楓を栽りて
此祠に詣りて彼の土窟を見れば一滴暗涙自ら零つ土窟は深き
一洞ありして其中疊に杖を敷き置しとふ湖邊の宮の御首
も墓なきは祠後の教にして宮の御骸を葬りしは此より三
四町東南に在り 理智光寺の後丘をいふ

は洞窟を御に怪しむ
相模風土記の著者云
之ヲ辨えし詳

頼朝邸址は幡宮の東に在り今は個の碑も立つみにして流に
田圃麦を漸くし野雉の啼ぶ榮枯盛衰の理目の何
り見し来れば自ら懐古情に堪はず在柄天神は其東北に在り
極樂寺坂巨福坂は鎌倉北の方に在り 其より新田氏の軍勢
攻めしり口より其特大館某の墓猶坂より數町の所に在り
星岡井を見ても西に在りは長谷の觀音有り 其北御輿嶽のふ
もきに有るなる大佛有り像は唐銅盧遮佛にして高き三丈五
尺奈良大佛を其より日東の天銅像を其より
極樂寺切通をすぎ行ば左に稲村や崎をのぞむ 其前には由井
七里の西邊を帯び西南は江の島及び富岳を望みはらに松山

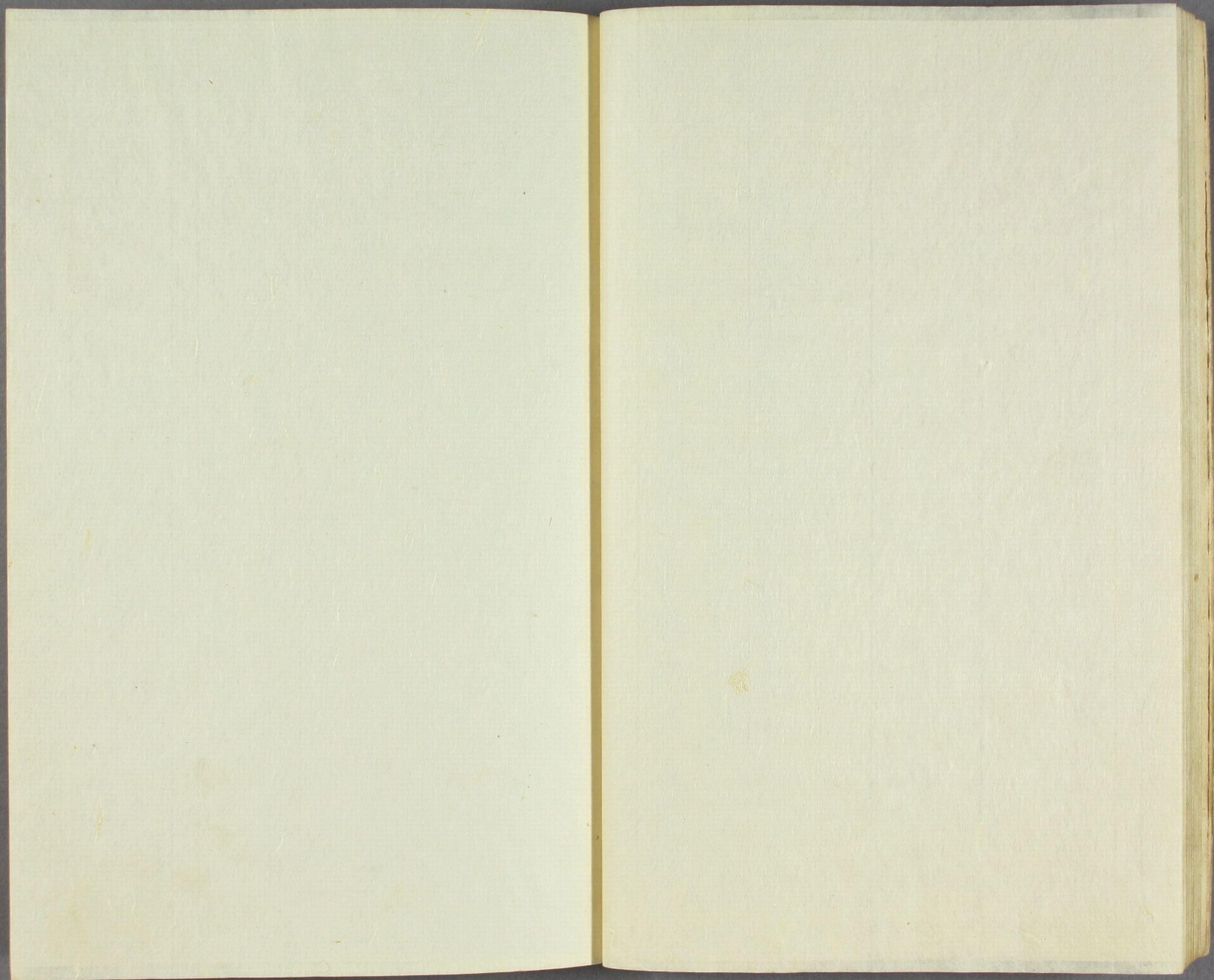
を負ひ風光絶佳なり江の島に坐り同日蓮子踏を龍
口寺、義経の遺址も満福寺なり

江の島

片瀬の洲鼻より島の北に坐り十年町退潮の時砂洲を歩み後
より常子東に七里由井の西濱に有り西は富岳函館より大磯
由原の海を望み南は海を望み大平洋に連り四顧皆三相房
總の風景を巨く眺望飽きることなし

本宮は龍宮中に河室海女の神像を安んず宮内には南
より向ひ常に海水を湛へ甚く危く左傍に改りて棧を築き宮
中より行くとて愈暗く炬火を回して進む中には三の穴龍と怪

石何れ此来と道に奇字碑下宮兒洲などあり人のを
知る能はずばしるものなり武相の地古蹟に富み奇勝又少し並べ
待て陸機在望の目更に錦葦の長きを学ばんを



初北旅

一金華山

明治三十五年辰四月九日兼之泊米之置し故今日之是班十
 旅之志を回志の人々送るは天の氣宜しからば明日を
 世に聽きしは波にけり風俗を雪を以て降る
 十日朝に起き支度ししに回志十人打ち連れしは傳事
 場より起りし氣事として塩竈よりぬ切し是より如何なる思
 へば折れし舟の秋に濱に舟を何れに打ち來りしは風
 止まればわらみ波をくしく舟は船の氣船をば揺ること
 甚しからし松島根の故郷する回を過ぎしに島に隱には

夜が泡雪消へて支那の眺めはほろろと慰めありしや
ぞ胸若きまに堪へず船底より臥しぬ船柱を舟忍
ち止まりしむ可きも多きを甲板より見れば早の萩の
濱にうきまき舟船なり上陸ししが同志のうたふ心也
悪くはに休み事かむをいふは何の家よりぬま午食の
ころに地直すればいざ行かむと相者に道は柱よくまこと立
ちぬ

萩の濱は名高き船の湊にして此地は三方山を包み一方は
関のこゝろから風の如く風を避く便なり且は水深にして大
艦巨船も船入しむるに由國の通り故の家は僅三三

軒洋に又ぬ行くは経緯とある事と答を多く土地の形勢
中子道はぬ様なり

こゝろの路は思ひこり思ひこりして路をより下り濱邊にあて
て岸上より山の上の景色はよく大海の口には島を何
り山屋の軒の梅白く後ふは椿の葉を成りて関の杜鳥を
へるかに陽聲波の音又あかきし

十成をふ村を過して吹く空を白雲の日は薄く風一
こほりて荒れ沖の鷗をたむけり物津より行くと
岸を波をたむけり山鳥の波はひさしむる心
もあかき人々同くは今も風浪りぬと風をたむけり

大出の山を依
浪のいさや
のいさや

錦繡をこしと理遠く霞み流り
風雲たふ引くをまほ
しあふ美しく今こそ明かきて樹の梢には鳥の群れを啼く
中もろひ来し振飯を頼張りしと思来の味因下之難く
不食に便はずと皆鳥を投す無う扱はけ鳥を見た形度せ
やつくしまがこの島は空の外は家なれば食を何さる便ふも故
きんし

案内者は道者巡りをまてまはすは島を周りにて
ふ里を重かぬ同志の士は鑑言をもとふ方よりふこ思ふに
吾も之を同いぬ後に少くはこは天柱石をも思ふの外別か見え
るを所いふし

山を下りて空の前を過す知らぬ山路も今方りて山越え不
如かむの細道通り卵ぬ樹は森として日光を遮り泉は滑
ことこ木やまに響きよ鹿の三三足岩まよりと水飲あり
小まき鹿の子の岩角にしろも何れも知らぬ鳥の啼く聲
のいしるまに聴きけれと足元からそねにあれば大木の枝れま
ま取り除けもせず今は打ちを掃く何れも言ふす岩地
まらびんふりし法母は深くして軟この聲なり
やがて燈台をよる守り人よ案内をわたり一見の信置は島の
東端の上上としてその高さを百余尺の花崗石をも疊み上げり
後の小山に大刺の仕掛り天邊のけ燈光効あければは雲

し氣方下次きとて、燈臺の場所から立ち去りて

時つれは歸りて去り、本路をまゝに歸り、午の膳朝内

来の飢を療む神主に還かれ内殿に詣り御札授けられた

より山を降り、波にわたり、山嶺を振り見、雲出の列れ

惜み無、道は道の道をたどりやがれ日暮は秋の夜に

一宿す今宵はたす波の音は流るる夢の夜を醒むる

夜をゆく

十二日宿をもち、波に白ふ路をく嶺は折つて波に

か風景殊の外とし山は概ね早山をまがもみ出でぬ草

の朝霜を帯ひて白きに朝の光うらさして雉子たむを

丁酉の春金華山
山火つ山火餘
存名を今も
早のしよる

方

波をり、路をたて石巻まで一里を過るに、に年長はつ

今宵は松島の月眺めをかねたり、心期をいし、室は曇

り来ぬれば、同志皆舟を歸らむを以て悲し、我の硬派

ま業、我の心に衆首を執、誰か、打つ清かれ、我の舟に

能くことしぬ

白山岬を過ぎて野蒜の表、松島湾を横り、塩田の子

が、浦のまは火より次なり、直に流車をかき、まらぬ

け行僅り三百もて終り、ちほ暇の河れば、友ある齋

居を深りて明をまらぬ、根は流はる、哀れ今宵の夢

はひりふらむ

二去根

十三日朝に風車より大河原より行きて山を二宮驛より
廿回道は白石川の岸より松葉木三里より四方の山に
夜子と蔵王山より向く峰に次ぎ白く雪を帯ひ皆
氷衣をまきより田舎間は菜の花の黄色また黄
蝶白蝶三つ四つ追ひ追はれつる花がわらわら帯を
田舎の子をあれども昨日を海邊の飽きりし目には又
ふらふらし永野より三里遠く田舎より上りよりこも
温泉河れども見よ所むきとくしければ冷みお茶より一里道

大まかきふたふたが近ごろ石をこきければ破断三を刺して
堪難の後にはきけば近道はゆるゆるやむる根よりふたふた
閑に投ず温は清くして水の如湯坪ひろくして世中にこれ
かを得て地け山がたけり朝夕雲霧のまよふ素直の眺め
まよふまよふのこに未ださう多く何れに説き事欠かす
後山の中にあると二日坐りに浮世の相角轉變を忘れ得ん
せしの想何りかう十日もあらずいやく是れ知をせむとら
永野より近道を取り大河原より出で流車より歸り来
ぬ。

十七日旅の勞れの癒へせぬに人々勸められ昨日はすこ

草鞋^{ハシ}は^{ハシ}松島^{マツシマ}に遊ぶ同志十人付お富山大仰寺に
宿し休み有る遊む盡くし色黒くとなりて歸り来ぬ
は頃我眼疾有り旅行中^{ハシ}薬唾^{ハシ}を^{ハシ}持ち行^{ハシ}
療用せしが歸りしは全く癒へり嬉れし事この限
り

廻國初程

一 奥州街道

仙臺より東京へ至る奥州街道凡そ九十里許ありて奥
 州街道は陸前船城若代下野下総武蔵と一帯地
 嶮々所もなき陸前風景もよく一帯は白河と無事
 あり然し奥州街道は津極と論じては奥
 州街道は是れ奥州街道とて特に重要な大路は老
 々迂曲して道程長き事あり平地の外は布設するは自然
 の勢ありて風景もよく設計しよるは河原ありてれば
 あり街道の中にも奥州街道の見えん事ありては奥州街道


天然の旅行
通の口吻

東海道の如き風景よりして将に古路の多きことと云へば
さし隙に鎌倉以下より往來頻繁にして權の歴史的
實の歴史よりして其の筆よりして故より實に
以て唯れ其の峰の河を為る其の多岐を添ふことし静
園の如きは濱名湖、勝河のみ其他の如く河を流すことか
ら

風流の士行脚して天然の美を接觸せんを故に街道以外曲
りより高を撃つるを要すし街道よりして
最も近しは黒坂（行末の黒坂）と白河園地（白河園地）を以てし
予が此街道を行くには實に廻國の如くして未だ充分

経験ありて諒の精細に調査せしむるは且は同様の故
に行程を會り比較的日と行程とに於ては海軍より安直に
成るをん知りし形跡なきは其れを直に街道
の上を走りしのみを以てし探検すべしと云へば今更
憾の事なきなり。

只此より出乗りし景致の稍可なりと感もは此の途
上月那池原上の雨なきなり。
昔の近き日不の町に着きしに明日は飯坂より可成安楽
の道を清きせんとの老をれば今更は越河より初るしとし
又生じしちぬふ越河の有様を知らずし停車場を設けし

知られば可成の旅所あるを假想せし故に
行かば
齋川驛を過ぎし次層雲峯を過りて
山は低く回廊既して
一々一々忽ち一嶮段行登りて
山は鳴りて木も
谷同静なる山家の故道大日
登りて
山は鳴りて木も
ひびき禁火西三志を
行行
業樹翁業を
て月
支書く怪鳥一呼天地寂寥
一萬籟俱從
此静
死せしに
山を
れば
終田
同
出
宿
草
風
冷
く
天
の
散
雲
路
を
沾
ほ
し
輪
の
大
月
照
る
屋
の
内
り
鳴
守
け
月
の
光
は
先
に
去
る
人
を
脚
腕
せ
し
の
な
れ
か
を
お
も
ひ
し
山
の
に
越
河
に
つ
き
 驛 端 の 世

おきこし家初

次は那波なる雨を
かきこし
かまの
老
一
失
策
の
記
す
も
の
え
阿
れ
飯
炊
を
朝
早
と
言
て
強
ん
十
二
里
の
路
を
炎
天
の
曝
を
れ
て
本
宮
つ
ま
し
は
夕
ぐ
れ
時
なり
け
し
又
議
論
起
り
今
より
那
山
を
行
か
ば
も
同
志
は
流
車
を
行
か
せ
び
其
旅
所
を
世
に
ひ
ら
く
時
同
夜
着
表
を
檢
し
七
時
何
分
か
に
確
し
出
る
は
七
時
なり
や
不
に
女
は
待
回
の
長
し
けれ
ば
王
子
に
也
行
か
ば
も
以
び
道
上
に
お
れ
彼
等
は
流
車
を
行
か
せ
し
其
は
亦
す
る
に
し
我
等
を
彼
に
批
し
け
り
急
進
之
時
次
那
山
を
先
に
停
車
場
に
ま
り
見
た
彼
等
影
ど
に
あ
し
と
れ
ば
初
め
り
と
な
る
ま
じ
ま
て
其

恨むらば當時
青琴先生の顔
色を撮影せさ
りしとき。

近傍橋店を留り市中残る隈なく同い舟の中にも
かき書し流し眼の悲しきは女棹も旅店と思ひ送りしに
（本）
舟中服装と髪とを我れはすくみし何れも思ひし女
即ち女が涙を流し居るは不思議きうに我れ見ると
あんなくまより思く名をうち出さず見し我れ涙ま
たり自ら涙せし事さすかして後より當らぬば今は泣
かす我れ初めは心も諸女もみれども一の客さ中よりと
思はけは蘭商の住居盛りに皆混雑して皆故別れ女を
泣かせられ合は絶体絶命に十五里を歩みて陸分
禁しとて書札兼行し一程旅となすければは舟中より

白き行きの袴を越え居るは足下を歩みし諸女何
れもわしとすしとすれば是もは皆鎖して遂に言はれ
し一町行きたりて半道も来しと思はしは道傍の家
の草子轉り承りしに我が所は旅店にば泣き止むとて人々を
張りし何れにも後りに舟中をいひてのやうにぬれた曲を
世帯はじりていひしと陽なきを怪しむるまの女
中へ入りしを来りしはけりすもあまがちり見しに舟中
ついで船中より舟中の油煙を吹きし女を顔出すは此物
の影をいひて見しに舟中を住しし彼等と舟中子と
見しとて舟中子何れもは奥の舟中子と舟中子と

變り奴、三字下
得て千鈞の力也。

ふもこしは言はなして髪を奴の髪の中より
いさぐ改められぬは眠る朝早く目覚めて自ら雨戸を開
櫛を握りて眺むにかならず来久しと見たりたぬを
ありし直に飯食を授けさせしに宿の者等はまだ起き
三つに漸くに飯食をさしよしてさあつ日に暮れ
半夜は彼書かぬ國志の法す所には此謂の何分と見
は平に宿の宿に千前なる故法中よりさし書かぬわ
何をも追ふて郡より千前なる宿にさし見たりたぬを
くの手教らしめし宿をとりて今朝早く發して道より
は諸れも待た思ひたり。

白河より守都宮まで法を二十里の河那流の本原なり
に、村の宿より守都宮は村道よりさし出れば雨は條
実ながら予は夏服一枚にして衣のなほぬれぬ
れぬるまゝにばりたて身よりし里を懐遠にふる満
似るる笑みぬ雨はさみりて生つは道よりさし出れば
身も汗をぬりぬ里を懐遠にふる満遠にふる満遠に
は乾きかきつはぬれつ忽ちこころの運雲雨自漢を林を
二彌漫の里を流しぬれりわさし一陣の疾風林下を
て木葉を吹くこ動き輝の聲ひとさ歌む指こえ何れ
其の雷南の陽を起し大雨沛然とて激の如降き

黒白も合はれぬる事にて林間より水は梢より落る雪は
正に注ぎ流る地へおぼしき走るを林を去り幸甚天
のまに駛るに雨は強くやをり日も暮るれば也
又華しく那波の驛より夜ぬ衣ぬすす乾かすし此に
翌朝みたり編ほ全く乾か流るる者もあらばくは又も雨
の過り守都宮より沖へ其間より又乾し返ぬ衣引よかりてけし
又建雨の過り古河のまゝ宿りぬ雨三百ぬれぬれ漸く雪
まねをぬれぬれぬれは道の塵をえまきり一向度東に宿り
し時は我一人は怪しき色を帯びて勿忘古くなり
に

能因が秋風を吹く白河の國と水に陸奥の境よれば
多し物都ならぬはく或は又語を尋なりふか
此は
都宮より市街社殿より此に小東系の観をたし一
此は
近くに陸奥の軒を渡りたりやくと見ゆるを流す
予、井田が野木の友も共に七月九日夕に仙臺より
先沼越河、飯坂、郡山、白河、那波、守都宮、古河、越
前、泊り十日前に家住より迂曲して里道あり
打つる先を尋ねて同の園子へ腹便りなすらぬ

に中波の身見とて思ふはくし七里の遠のつゝは淋雨
りの不決りおぼしむるを嘆き新し得られし様橋を
流りこの場こゝに止れ

こゝを遊むことればはれはききみ祥しく見ず例の
空まかりかりと預亭にてと無理に法判して十錢の書
飯に腹を癒しこゝに威儀あらうやがし又は淋雨かり
こゝに徳寺ありればは亦鐘舎の方とちんたわり
余はこゝに西音帯在せよと教たりしがはの日皇太子
殿の行幸ゆきは御旅ごりょは充塞し他の家をもし合宿なを
はまはれしはよむる前案を飄し徳車場より一に

折れし風車まぬれば起り舞りて黄昏の次は澤澤さわさわ
つゝぬの宵は初め獨りの旅の身となりぬれば惚れぬこと
こゝの如く様と覚ぬ

翌日の朝夜とて遊行寺しこゝかき見すこゝに砂地の聲
捲き起す甲吉道に別れたる者の逢ひぬれば路
涙のお様もな、紺衣たきに腹膨くらつ凡五里とて伊勢
原より甲申氏を討ふ

こゝに泊ればは嫌して去る當面に突んきして雲にほぐり
る其目の空仰りつ雲晴れし人空を懸ははたれをふせ
とらむがし山の樹影の子安をいふより二十町の坂坂を上り大

抑も此の地望もいふは鎌倉江島橋津東系などほむ
更なり中房上流下流津陸の果するも見やく昔はあは笑
たる之峰傳出さして昔の丹澤の山つら甲斐又秩父の
も河をく西南の方は大磯小磯海峽の即ち酒匂川の
なり西根三柄の山を南に河を熱海にも曝すを得し余
はこに快歡を食らふ處に悠然として遊するも有る時
蒼嵐の軍雲脚下より起り涼風一吹捲り上り捲り
下し望海の如く日光晦冥となり物事止となりぬに
急きかたりと山もよき路雨粒は大き散の如く空
津市も滴滴聲なり

十日市場

山を登り右折れ敷うれまきに行くと大山の側
に満目惟か野みとし未だれば漸下らん
雲を知らぬ日支を辨む得りかして磯碓の路何重
村名は何と云ふか小舟少し行けば仙の煙草早の
産野を眺み生て別れ処畑と煙草早植るも見る
途中に馬に乗れども勸められしは馬高ければ乗らぬ
相模風土記に見し文字はなほ打ち過りて松田驛に
つぬこには東海道鐵道の煙草場なり
夕霞たなびきし四方の山々をわたりて我か是非に行き着く

三里苗原に着て左黒神正堂を討ひ由原城址と上り
尊徳神社を拜し轡^しにけり袂を分ち湯^本の方赴く
鐵道馬車の路を行くと里許に朝日橋を渡り湯^本に
つりぬれば燈籠の電燈の光を猶も映しこの山中に不^本城
の出現するに至りしはまことに愛りける今の子やと感^一ぬ
又やこと此所許に^し塔澤^しまうくとこに宿借らむをせし
浴室充滿^りりにて謝絶^せあらし黒神氏より^し石介^状
を^し見せぬれば免^し南^りと^しあたらせむとて^し終^にに^し宿^に
う^ら家は^し林^に居^ると^し早^山の^岸に^りり^し棟^上に^は溪^聲の^洶洶
の^中に^は響^ひ流^るく^し夏^にに^は盛^ん外^に道^途す^も橋^と覚^ぬ

四、西根

樓^位前^は早^川の^流に^臨む^處を^橋を^渡れば^新産^の
下に^は山^原に^こに^は泉^源送^りし^し松^際の^若根^{より}は^はち^たた^ぬ氣
雲^を籠^りて^は海^風吹^くと^し起^る二^の婢^の少^女何^れ白^き
浴衣^にの^肌を^干か^きり^しく^連糸^をり^しも^が糸^をす^むに^は
此^しこ^の書^きすれば^は人^の同^の執^をり^し予^も真^個に^は第^二驛^人
六月^の初^日早^川行^く也^し
塔^の浮^き全體^のを^まは^し朱^露水^が勝^つ驢^の山^をか^つぬ^けむ^の
む^しと^し吐^くと^し一段^の盤^を幸^をま^せな^らむ^く高^原樓^俣俣^因
葦^を利^お棟^をた^とり^し王^教神^にに^は見^ます^る子^史社^位

回感

麗の有りさまにこそ百般の物具はらさるはるはる萬の物
り不自由ならぬ代りにはは家畜の安んずを折る事なり千
金一擲造る緑酒に燈の興を合らむまじし家孫衣絲
橋を流る天然畫圖自然の音楽を此と思はせし
波歌味の振舞に揚揚得せして甘蜜を枯らす令
之閑殺に地(さ)るることを多かりし又業
湯泉は流槽大にははるが新とてあらふに流る湯の
此透明にしてはるがすねははるに電燈をつく
我々を初よりし男は二十七位の年位にして東も果
橋何れかの海音の作たるより一歩前に富士に登り

青琴もふか
如才ふしこの
とこら頼る其
平生に似せ

と羊子思ひをなして世歸るるよりおまに直し是の奥山
深く波流せしる脚跡を踏ぬまじしに事ごとし唐表
すまなりとよめ元束は君より知りたる様の強しなり
保此ぬれし定ぬ男たれも流る海音の作らるる所
何れも羊子を買ひ酒など振舞はるは又悪くかぬ奴
なり
一日の回はなすともなく午睡たひし探込歌回ねし
たれば織こもる夜月山角に上り岩雷一様緩
く響く溪聲靜かに松松の身も破れし誰か
さかむ笛の聲は劉亮せして新橋の上ひびけり

廿九日 山に登りて、散々の所湯を方より玉簾
流を水は流す事なく折れ流るに流す事なく、右角に觸
れ流すに四方より散りて虹をみても有様をみに可
なり。この山亭因り切付を當りし人をみれば、俗の又俗の
平川の深きほむものには難する者には、山樹を木の河に
を迫り、流中の風雅のほむもの折れ下駄借りしは、衣裳
を寒中、滑り、事なりと、山堂を、さるるを、今
は、徒ら、人の利流となり、多し、山堂を、流す、せし、山見
す、山、この、限り、たれ、而、我、は、は、山、に、山、は、山、は、
のみ、花、す、と、物、た、ら、せ、や

曾村兄弟の三牌など、安置する寺有り、
山は古も、ゆるが、傍に、建た、基、師、の、建、に、し、も、と、さ、
寺、は、の、り、と、此、條、土、代、の、是、に、山、林、山、堂、の、事、り、
なく、山、の、り、と、か、ず、れ、山、を、辨、せ、の、代、改、林、思、を、山、み、さ、
と、宗、抵、山、師、の、塚、を、掃、ひ、風、流、又、雅、山、堂、の、事、り、
山、堂、を、山、堂、の、山、堂、の、事、り、
寺、に、山、の、り、と、山、の、老、安、山、の、事、り、和、尚、は、不、在、山、の、事、
山、の、改、山、の、事、り、山、の、山、の、事、り、山、の、山、の、事、り、
山、の、山、の、事、り、山、の、山、の、事、り、山、の、山、の、事、り、

こゝ世をやみ奉り川流板橋いづれのほとりにて
今も梁がよみ自ら尾にまはるる我の生還いづれ

東あづま

西根権次さいねんごんじの祠も千石で離宮の前を過り相根の碑
のく道すがら湖邊の風光はよき離宮は日暮色
最もよきさうなる湖白に実出する塔が島、池上に可憐
あらははに鬼と多しと云

秋天の湖の日は老松空峰の湖白に倒映するをいふこと
紫の山をむくむなり湖邊酒橋をの嶽巖棲たをいふ
阿婆世の雅なる

是よりと坂をたは相甲二國境界の標石なりこの
は菅野に道は不存なり却りて行を報せらるる三島
まゝと回し三島の寒村なり昔は西根軍が屯所に
中望し前子後島東美の力を併せ上はれ下はれ往還絶同
なりと路も今は寂しきし人行路の稀なる也
三島明神に詣りては靈を申し奉るにれより沼津に
赴く路すがら樹向は雲霞の眼前にまをるとして
心を望むる陽嶽皆の屋敷に霞霞の山色亦何
の如きなり好色なり軒に思みかり一柱の輕煙
塔より布きし人の塔火あつて煙の暗きとなれば傳大なる

夫は中程に眠るまゝの如
けね津津と河を明く水は古佐野の方か路を同
く河の東より路を遠く一里有半也より左折す
たりしは河をこき然れば河は三島に宿るなり
一日大急ましく波れし定をりたりと暮るる津津
に行かば無益の勞に何りし蓋し此行余は地圖を
持て旅行便覧なる宗定来たる案内記よりより
り河は河に無暗矢船に唯以後に程を食ふ是惣此
しをそし故に其尖束の起りたるが先くは信の換
は終るして自ら慰む夫又より河を渡るるなり

田原道のそよふち難きに生憎に河を食ふ人を通は
度には山道に味ひをみたるは集河の漸く
に佐野澤園のく切符購ひて中より澤を見す
園は五穀穀もふ園内より澤の激し故なり吾解し流る
き河より幅十丈富貴流るる河上幅十二丈月也流るる
河より幅十丈銀子流るる河上幅七丈狭き流るる
河上幅十丈皆出産より相並むる運送する事と云
河を執流るる河を運送する事と云は
愈々なり澤下澤は漕流に盤渦也旋る水の色黒
まじり

逃げ入るあり

馬道に馬を下り、谷物は皆中内者で盛け、
中内は力も足付の強力は別に若干、誰印を積
し、山頂の小屋を高くし、足付の河原を中余なり
にあり、亦三行、松林の雑木叢生、あかし、
たふさ、生か、盤、日影も、ぬ、く、ら、な、ら、に、ま、し、
く、く、く、水は路旁未だ、晴る木根に、
牛丸のみに身を躍ら、
て、
業を自ら、
後に見る、

未だ

仰は、
項に、
に、
就、
速、
遠、
も、
路、
勿、

か、
ね、
の、
向、
操、
に、
見、
右、
と、
中、
野、

北方を北は白く曇りし所なり。雲の巻れし。不可奇
之を河内山の中二胡なりと云
やまの山守仙翁破此起る。然く将に辰と此症
かむ。余は主はまゝなり。折節。凡そおきて。洋金
運着る。昔より来り。甲州。和丸。砂。吹。り。上り。強り
て。余は。輩。子。老。し。枝。女。と。せ。し。也。者。の。同。冬。月。に。か
ま。せ。り。し。衝。く。に。辰。事。を。終。れ。ば。彼。等。は。已。の。先。の。老。者。
支。五。散。と。輕。装。し。て。手。鞋。け。る。不。明。け。や。ら。ぬ。室。の。残。月。の
く。寒。け。た。ま。り。に。身。衣。か。く。定。え。よ。り。見。定。り。程。曉
の。光。り。

本草の
講義

路は平。山。無。く。江。曲。羊。腸。が。明。な。す
唯。古。草。鞋。な。り。之。を。何。の。名。か。知。ら。ず。散。石。大。き。い。し。こ
く。の。山。は。け。ら。の。海。國。や。し。の。こ。た。れ。ん。石。を。さ。く。
さ。し。こ。の。名。は。灰。遣。物。な。り。こ。し。上。の。今。ま。ま。の。此
ま。で。早。木。の。名。は。何。の。名。か。知。ら。ず。地。上。の。名。は。何
の。名。か。知。ら。ず。何。の。名。か。知。ら。ず。今。は。忘。れ
但。し。け。は。雲。並。少。く。生。ず。よ。目。ら。特。異。奇。院。の。所。何。の。名
之。を。煎。を。服。用。す。れ。ば。病。を。治。す。こ。の。名。は。又。富。を
山。の。名。物。と。し。て。濱。州。出。り。味。酸。く。と。聊。の。甘。み。何
り。食。毒。を。治。す。又。肉。皮。袋。な。り。今。の。所。に。仙。氣。創

こよりに九谷目し通り胸突可嶮か後予り白雲
 函根山上は霞たあひぎ東海に萬里大瀛の氷の色は
 煙吹れやまじし赤根さし曲三禁のほる朝日影は帳
 外とこ一躍は桂桑若木の梢より瀬の洋にゆるる景色
 龍底のつらきとよみす結の平心の閑思に傳はるに
 明かり遠山小村賤を休むは東天如雞の音に分
 家の音を次しなり景象分明をなやに打明るれむあ
 ぢちもきく函根の里の峻谷の下びく蟬りし聲は
 寺の横をほのめくまじく受待馬は疑はるは疑塚の疑は
 疑はる

まの如く漸登る途すまの嶽夫の姿形すまの奇と見か
 こいに似ぬの遠きを數十丈の長光にらとを顛轉起伏
 こ満目荒涼寂寥太古古氏頭を觸れ石岡山小
 り天輕折に地難がし海を向て坐らに油黒山具の觀
 念を起す
 成就岳平岳嶽三島嶽嶺峰白山嶽皆より
 黒嶽の不少を中し劍峰は以上の平面を抜くこと三
 十丈即ち山頂の最高處なり内院を以神地を以て
 古者大壇を以てし洞穴を以て坐する石色は赭
 褐色をなす

龍吟水一法
一もんふの橋人
一もんふの橋人
一もんふの橋人

際上は三軒河又浅河神社の本社河は又
龍吟水の中は神河う煌々かやと拍音は
龍吟水の中は神旗はとて風飄々

宮にこ体健む甘酒飲み飯を食ひ
たに龍吟上廻りもなまむもこ
ちよとて砂吹く教志打ちぶ
中よ中聲水津津と世執の劇
さむさむさむさむに強力も流
たに龍吟上廻りもなまむもこ
ちよとて砂吹く教志打ちぶ
中よ中聲水津津と世執の劇
さむさむさむさむに強力も流

仙の年大に体は風は吹く
さむさむさむさむに強力も流
たに龍吟上廻りもなまむもこ
ちよとて砂吹く教志打ちぶ
中よ中聲水津津と世執の劇
さむさむさむさむに強力も流

龍吟水と流るるに
阿古美と流るるに
龍吟水と流るるに
阿古美と流るるに

龍吟水と流るるに
阿古美と流るるに
龍吟水と流るるに
阿古美と流るるに

ささるすけ消さるの跡なき

芝路は強し油走る長くこの雪は短く谷目より四谷
目より何れも雪が軽なり代りには彼に似て雪まき
申なり走ると雪は滑りたる果尻よりおこなひり
つ片まかりにすくもなを思ははるにはさなはたて
のみにて散るる故とあはれく走り下るるに走り草鞋
と申すは特別な走り草鞋なりと申すは二重の三重
の末まき草鞋ははるれ様しかりと膝の杖を手にして
勢ひ込むるなり走せ躍りなり疲れぬ時は杖を碎
りておこなひはは田舎人は遠くはれりてはるまき

女合目よりこの雪は殊なるやなり
雪合目すればしりしは木となり路にたけし木根
先角の隙と指の先とに打ちこみ我回るるを知らず
只雪多き行程に三合目たつきしは十二時頃なり
頂上を廻りて東洋世雙のふしの行先は雪事
仕済しえれば人少き雪の道ゆく雪獨り心洗の酒酌ま
物とて田舎酒の酸味がりをを厭はるる杯を飲け
夏は飲み干すから直るは酔はず脚もくかき氣
かきぬぬ暇申さしき雪の主人に列れ急ぎ下
る坂路はより書きかきぬぬ夏の日の真事すこ

すゝみに雲峰空高く撞き出でぬ

悪酒の酔必死のよからぬが可^しな^らば^し全副杖よりまはれ
放浪鳥存して行く^に名^をち^も老^の杖^はより^もま^るが^一禮
^の去^りぬ^れ彼^れが^先慈^をも^と無^んな^れと^も四^酔の^性
遠^くを^いく^打ち^腹を^ち一^會を^も早^の息^の切^りも^もつ^り
木^にあ^る走^るか^ぬ止^むは^ささ^りに^追越^せし^又抜^かれ
は^天も^もた^は多^きを^之以^てに^咽乾^きに^乾き^垂れ^ぬ
干^すも^愈す^もに^ほる^水抽^くも^なは^れば^也
猶^も存^す也^胎内^の宮^はこ^の邊^り曲^りと^定座^しと^いふ^も道
足^でい^らぬ^心を^行の^過ぎ^やが^夏野^の末^の草^をも^つる^も

咽乾きも地^の水^を飲^み人^の必^死を^して^後
た^は拙^劣く^食ひ^しに^過せ^し番^はし^け又^知ぬ^境を^呻
吟^す折^しし^富の^音四^十倚^女来^り其^親切^りも^也果^然笑^れ然^と
た^は漸^く回^復す^たま^の姫^は日^に漸^くに^西へ^傾く^意
ま^まは^すは^舟津^はい^らか^土る^もか^中に^全く^れぬ^也
何^ら笑^止の^事や^など^年げ^にか^つ留^をし^りの^女は^馬佳^ひ来^りて
勸^め又^行き^中より^麦杯^果を^取り^おし^んを^笑れ^也切^實
や^不御^手は^向の^強飯^もし^つが^中り^しな^らぬ^也彼^のあ^はれ^も
中^もも^故今^はは^なる^て食^ひま^なら^ぬに^酒飲^みぬ^も
心^がわ^から^ぬも^も心^をし^こも^無念^下也^也後^へ

東北雪三方は山を環らし南は氷水と隔る芙蓉岩
萬回雷雷轟轟一陣の長風浪半をこし獄獄より吹
り下し湖面を拂ひ涼氣衣袂に満ち船を打撃歌
と幾回湖は深は百餘仞も餘り風暴をこし波は
を翻す心遊目は湖向鏡の如中なり舟の漸す
小島を見えれば山鶴島と又乳崎
彦彦崎咆々崎を望み湖中より出でて小甲角
を舟の舟尾極まる一止しは湖尾東流を桂舟と
今舟故に河の名河が真敷の尖り際し沙石流を
塞ぎ近年一山腹を裂き流を決せし水量は幾

舟を毎き

河村の... 河神社河
杉か... 神木の年古り... 抱き...
故... 舟... 河神社... 昔...
杜... 舟... 河... 近...
三... 舟... 折...
白... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟...

衣行者の登り行くは様の細路を傳ふ如くに又其六の
流ゆる跡なき帯をたし一歴こゝり一河津理の者先
生紙の陰國探のよりかつけ今に詰り試に彼のうらほわ
るる事や凝固其るる時を坐忘其の如何はかり候
漢のいりりなるはなほいりり

けは昔の景行天皇御宇日皇武甕槌皇子定栖の原より
中陵路をたてたまふ女の甲斐の國よりもひ坂に御坂
を築きとむり上はかや平担りにて秋の七草今を感りて
日自ら下界塵界に異なりとて心風をたてし秋の心
物一ぬ

次には第廿五の軒の結衣又下り上里海江と村
河の如くを午辰と一息をたて下る路は常に
新流の流るる下黒駒の流るる破羅の流るるに
三より甲村の流るる馬車河の流るる義理元をはなれ
て一より別れ流るる六波羅の流るるに甲村の
流るる山吹の流るる四の事平の流るる道下樹林の流る
流るる流るる流るる見事如く甲村の流るる流るる
流るる流るる流るる武尊の古跡なる酒折の流る
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる
あはれ

倉夫尚ほ我を
見限る活帽
破蕨想ふへき
あり。

雲を御望めば鳥雄山風鳳山など事つる高嶺峻峰
望錯し^{四境}其^{四境}みぢ山なるは流し下^{四境}流し甲斐の
名を^{四境}事りしなれ^{四境}超^{四境}所村^{四境}家^{四境}満^{四境}さ^{四境}つ^{四境}る^{四境}と^{四境}と^{四境}
ふ^{四境}ま^{四境}の^{四境}懸^{四境}す
善光寺大聖寺を^{四境}宗^{四境}也^{四境}教^{四境}る^{四境}仙^{四境}堂^{四境}の^{四境}街^{四境}通^{四境}す^{四境}ら^{四境}ず
舞^{四境}み^{四境}の^{四境}の^{四境}移^{四境}後^{四境}水^{四境}は^{四境}甲^{四境}府^{四境}なり^{四境}旅^{四境}者^{四境}身^{四境}や^{四境}に
去^{四境}を^{四境}見^{四境}悔^{四境}り^{四境}と^{四境}さ^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}と^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}と^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}
ふ^{四境}く^{四境}く^{四境}一^{四境}故^{四境}止^{四境}む^{四境}く^{四境}止^{四境}ま^{四境}る^{四境}待^{四境}遠^{四境}す^{四境}ら^{四境}ず^{四境}
舞^{四境}み^{四境}の^{四境}の^{四境}移^{四境}後^{四境}水^{四境}は^{四境}甲^{四境}府^{四境}なり^{四境}旅^{四境}者^{四境}身^{四境}や^{四境}に
去^{四境}を^{四境}見^{四境}悔^{四境}り^{四境}と^{四境}さ^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}と^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}と^{四境}し^{四境}た^{四境}ら^{四境}し^{四境}
休^{四境}ま^{四境}る^{四境}事^{四境}なり^{四境}

七、身延山

八月十日朝二所を^{四境}学^{四境}に^{四境}宿^{四境}者^{四境}北^{四境}の^{四境}山^{四境}の^{四境}飯^{四境}茶^{四境}漬^{四境}と
の^{四境}文^{四境}及^{四境}智^{四境}に^{四境}荷^{四境}物^{四境}の^{四境}事^{四境}も^{四境}強^{四境}け^{四境}身^{四境}輕^{四境}た^{四境}し^{四境}一^{四境}部^{四境}
室^{四境}の^{四境}河^{四境}也^{四境}の^{四境}温^{四境}泉^{四境}ま^{四境}る^{四境}や^{四境}が^{四境}同^{四境}し^{四境}道^{四境}は^{四境}は
ま^{四境}と^{四境}昔^{四境}の^{四境}去^{四境}殘^{四境}月^{四境}の^{四境}光^{四境}さ^{四境}し^{四境}と^{四境}曉^{四境}大^{四境}の^{四境}雲^{四境}は^{四境}衣^{四境}を^{四境}濕^{四境}し^{四境}甲
府^{四境}中^{四境}町^{四境}打^{四境}子^{四境}と^{四境}如^{四境}打^{四境}れ^{四境}同^{四境}谷^{四境}な^{四境}り^{四境}幸^{四境}に^{四境}遠^{四境}く^{四境}旅
や^{四境}心^{四境}折^{四境}け^{四境}れ^{四境}未^{四境}れ^{四境}は^{四境}田^{四境}の^{四境}面^{四境}の^{四境}朝^{四境}風^{四境}を^{四境}さ^{四境}ら^{四境}り^{四境}と^{四境}外^{四境}燈
の^{四境}三^{四境}つ^{四境}猶^{四境}け^{四境}た^{四境}り^{四境}か^{四境}や^{四境}り^{四境}遠^{四境}く^{四境}山^{四境}中^{四境}村^{四境}燈^{四境}の^{四境}半^{四境}一^{四境}子^{四境}里^{四境}く
此^{四境}の^{四境}白^{四境}み^{四境}波^{四境}は^{四境}鳥^{四境}の^{四境}聲^{四境}頭^{四境}上^{四境}を^{四境}す^{四境}と^{四境}建^{四境}白^{四境}く^{四境}と^{四境}と
は^{四境}なり^{四境}

押原花輪を渡り全無のを渡り南胡去柳など
ふと過る伴の由人馬軍一飛ぶまき前子別れが
甲村より三里許^{（五里許）}先と奇遇しけり我旅行便
二見しに鞍澤まき三里河野とあるに最早つくと刻限
なりと思ふに三里河野の標も過るに猶不^{（不）}路^{（路）}の回
は^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}に大に疑ふ感ひしに鞍澤ま
き^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}はたれりたまはしつゝまらなも若
確信し^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}に氣を勞たしけりとも我ながらに災
しく目の衝く高き水は流り空の河つやたるには波
き^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と行過き^{（五）}三里河^{（五）}

町はれと河野川河船の端す所河一人の山童外
の客松を我に見て河を渡り^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
たりと答ひ^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}は能く^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}直には渡らば陸路を行けば^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}
へ^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふに河を^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
之切符^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
舟の用意生来よりを^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
と送り^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
こゝたけ^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を
し^{（五）}三里河^{（五）}三里河^{（五）}と云ふ^{（五）}身止^{（五）}を

りては

急流をたれ奔りたるに船歌三舳とよき水の櫓を動か
澤上をよみ来る時先を信知は樟の山許を又へ船
まはなし巧に御実の危難を越けけりし景色は理まに渡
赤まの山の松杉を生みむしむ對岸をよへ片方岸は新羅4
人の歌に似たりけりなるにけりなるに根を張らぬ
舟ちか歌きり又又の歌よみ苦しきまはむ言たり岸の
柳の葉まが蝉の聲よかまゝ偶叢影にままると
し候し息とて評りなりかまゝ波中をうつり上陸す富太
川の音懐きよはよむ下にして風風志林橋なるは

おちがが見えぬは道徳なるし詮は鉄
澤をまはしては彼はた吹たるにまゝはは猶ほ千の吹
のしと津餘り丸の洞を推知なると推知なる
し舟中下出町を初は河許にけり上を奇り白雲鮮

明日

波木村より下りけり半道許に山に達す朝霞の山り
しに復さる宮なり故郷に飯米なるを家
たけしに茶店を建てて麦飯を食わし腹ふくらし
やま山内なる
三に町河に旅宿の軒柳をい余れいをも好まずに

御泊り水（水）の世のれ正平（正平）の
餘り暑氣烈く文（文）は死（死）より三里赤澤（赤澤）の山回り村
を初（初）なる所（所）なる（なる）う（う）の（の）道（道）は死（死）に投（投）連
昌汗（昌汗）を（を）汗（汗）の（の）み（み）ま（ま）に（に）衣（衣）子（子）書（書）く（く）ぬ（ぬ）す（す）に（に）泣（泣）羅
を（を）北（北）に（に）宮（宮）の（の）海（海）風（風）を（を）團（團）雨（雨）の（の）か（か）ひ（ひ）に（に）枕（枕）の（の）知（知）す（す）
の同筆正平の遊（遊）を（を）か（か）ぬ（ぬ）

明（明）くは（は）十（十）音（音）若（若）物（物）は（は）秋（秋）の（の）道（道）を（を）歩（歩）り（り）こ（こ）飯（飯）の（の）世（世）の（の）金
剛（金剛）杖（杖）を（を）持（持）て（て）朝（朝）露（露）深（深）く（く）鎖（鎖）ち（ち）る（る）山（山）に（に）分（分）け（け）り（り）ぬ（ぬ）先（先）に（に）七（七）面
山（山）を（を）こ（こ）え（え）い（い）道（道）す（す）ぬ（ぬ）分（分）多（多）く（く）い（い）ぬ（ぬ）山（山）道（道）を（を）歩（歩）り（り）
雑（雑）木（木）繁（繁）し（し）木（木）下（下）園（園）の（の）石（石）不（不）の（の）礫（礫）が（が）こ（こ）執（執）す（す）ぬ（ぬ）杖（杖）の（の）杖（杖）
杖（杖）の（の）杖（杖）の（の）杖（杖）

地（地）行（行）の（の）程（程）なく（なく）赤澤（赤澤）の（の）山（山）

に（に）水（水）より（より）大（大）き（き）下（下）り（り）や（や）る（る）七（七）面（面）山（山）の（の）樹（樹）根（根）を（を）歩（歩）り（り）こ（こ）飯（飯）の（の）世（世）の（の）金
剛（金剛）杖（杖）を（を）持（持）て（て）朝（朝）露（露）深（深）く（く）鎖（鎖）ち（ち）る（る）山（山）に（に）分（分）け（け）り（り）ぬ（ぬ）先（先）に（に）七（七）面
山（山）を（を）こ（こ）え（え）い（い）道（道）す（す）ぬ（ぬ）分（分）多（多）く（く）い（い）ぬ（ぬ）山（山）道（道）を（を）歩（歩）り（り）
雑（雑）木（木）繁（繁）し（し）木（木）下（下）園（園）の（の）石（石）不（不）の（の）礫（礫）が（が）こ（こ）執（執）す（す）ぬ（ぬ）杖（杖）の（の）杖（杖）
杖（杖）の（の）杖（杖）の（の）杖（杖）

この影白を三丈の鳥を大石何一方柵を圍む
ふか高天女の出現をせしめたりと云ふことし社殿何しやび
かきむ山僧對して示すに教刻

こは自述の本山國の法教十年を經て後國を去りて
日蓮上人は一をばまは来とれりしをいふ也海白五尺
に造す程の高也故何かねもさらも其の目もいし
及んばつて勢を知らし朝もたもは始着む時りたりと云
ふと山頂の眺南方殿めは目の下にけり興津何り行く
海軍の煙土もいさるを見ふに富まは山たもの煙もいれ
ばよふは見えぬと云

時既十年を過りれば餘り山を降り赤澤に下り
それより^上裏面より身延の遠すこも岩社なる
社殿何りかの前には大士手植の樹何りこれより下りて
房に打ちまき山角をすこし行りしに北の方に雲を煙のこき昇
るを見つ何事かや怪しく思ふに西か石田の道に
如きは日蓮上人の塔何り傍には八角堂廟如き何り即
ち上人の遺徳を法に遺跡なり其泉十年上人鎌
倉より来りて何南都の御室長は波井の城の地は木
井西の山上より来る者深く上人に寄依し此山を歸
進しは西か石田の草庵を何りこと數年私安四年に

三ツリ始めて寺を備へて遠寺と稱す也又明徳二年の朝
上より更に之を擴げり下ると十数叶の眞骨塔を
以て祖師を祀り牌堂を相並ひ二堂を構えたり其堂を列
ね棟なるより此は嘉年一回録に准りし故更に新の架せ
こものなるが因縁精美を窮め金碧の輝耀をたせ其
有像は心と言ふ及けられ唯の眞骨塔に比しては西陣風
の似せしきまわしやを疑はざる能く冷たに白雲を以てし
如る猶優美の壯麗たる欠く處なしと云へり也鐘樓は
寶源院の僧堂に似たり大方より不壇下りし時
ては初よりいふよししりてはなるべし

一日の疲勞より飯終りて故張年の學徒なること旅店は
近年の況融の文を讀みたるが故に之を故まの金なるの能く
り望むは多しは流連の地なり也實に信は昔年旅して
二五軒十室を備へては攝山同の旅所を以て以合しからんは
何と清かき心も多敷の信は一時も未泊すること能かむと云ふ
今日日暮山の村は大河の千軒の家を由來と書く
所は遠きなりしより一帯なり切は先きに於
山頂にて怪しむるは此火事の。も何りしなるべし
萬燈山の中輝きし時青煙は溪河に垂す雲山も
諸石の影もく醒め支まらぬと云ふ同遊をいかに出で遊ふ人哉

来る人にきかす皆下山大事。又舞の及なりといふ切下
山村のりしむは白舟の舟と見えは是等と他火事場
の跡は石瓦など散ら布まゝが浦にやが燈の燈は是より
老幼の泣聲など假り中へ呻吟す見え自傷はし殊に
は焼く死に人といふが

有る齋屋の定りなきありて子散を離れ七ヶ村を逃す
に富山川舟を渡上る途夫と坂はる者より日の津満
うらも枝を戻る歎言するは正午少く過ぎたり
こゝにばし徳をわかたに馬車と勧められ此を乗り申
事かす

田舎馬車のがりするに養生もいなるまはなげの馬を
以て殺ちて歌せ行の歌捨張も甚し車中下山焼く者
の男何れかの竹下も竹下といふ白の太市は武家ほど天趣雅
揚しむる起すし太市移りしりに風はたき田舎に如
く魔の自~~言~~かたは太市いひたすなりきいと我も
焼く事あるは言たすといふより甲村の方を赴きみちのり
の助力をはむせたりといふ事なきまはれり申存着て
起はすなきと此よりいふまは午持振り既たり
甲村のりし旅宿たす主人村分住還の連かゝり賣めた。今
言は心よつれ。

に大方は道標有りて水は堤より紅が4代田村の一
軒屋より天神平と書けり紅途中何ぞ地難
き水車小屋に水束むにこれに飲む水は水は
自ら流る水も飲むと書けり紅思紅の何
りとは皆然りと少く一掬に僅く渴き醫す甲府より
三まか凡そ二里許り何と書けり

是より道漸嶮く左に荒川の溪流を瞰下し川を隔
て宝光寺峻く峯を眺眺新の山を走ると見ゆ山
は岩石重疊し岩壁懸崖と有り其色は白くはれ流
其形は一體狩野畫の者に似たり4代田村總筆紙

のし書しは道標有り

溪水駛速く或は小滝を成して飛跳く或は疑りて小潭
を成し碧瑠璃と銘けり世に故在する奇岩あり煙の異
形あり懸掛の如く湧き出たり或は花の如く岩は天狗先登
能先登懸掛石宮寺先登天狗石十徳石羅漢山一獄二獄有り
水は不動瀑、輓轆轤、長潭有り

行くと半里途上西に巨岩懸崖あり崖を来り相抱擁し自
然の宮門の如きをなす危嶮將に崩れ出するの勢有り在
自ら荒川の接し奔流の聲聴かざるに響く岩より松樹
飒然として清風を吟す途に西に石宮寺あり其起之園覚峰左に峰

此の河内國威の世同の流漢す一統の天光は亦一碧の流を
たすの似り。此の昔の流山の川を極む

途上一碑有り天保十一年此路を同敷舞し農夫園石衛門
の弟と記し向に結髪曲敷の巨大漢を刻し上に林鶴
梁の銘有り蓋し住吉豊田氏の及城は甲村少と此に記し此
を鑑みと甚しく遠くを望み此地の晴を揮りしうなれにや此
男力より此景始の人跡をなると境となり其地をなると
亦熟果して対せしなりと云ふ

浮石と云は水伸の横臥し七層之の塔なり石味虹彩をまろ
之と云虹漢と云何ぞ雅なるや此の摩崖碑なるは

又本軍よして危橋の上より橋板破れしを回す宛は
奔流をなすを今しと戦果せし此処の本の回れに深
を觀直下三丈輒六尺一溜して大潭なり一溜は危して壑
淵沖急波起る一陣の天風木末を舞ふ韻空聲は壑の
清とて長浦すれば時と仙客に流し飄遊し得とす者
の似り少なる橋を昇仙橋と云ふ深々仙娥瀑と云ふや
茲より二所許瀑上行は一洞門有りし為三丈輒丈餘の板
矢を穿ちて導くものにして崖側を詩を題する者多し凡
景の奇此に到る極む
此の景をなれば字猪狩の里より一宮十教軒回向は山陵

數十坪水田有り溪水流れて世間を之と満目 豁然として
見ると山は但し水田の表なるには古くはの類しく附着す
るに山は深きを知る

是より七町ほど宮本村御嶽金櫻神社達する階を上れ
ば樓門有り正面向本社有り左右に神樂殿寶藏有り
皆金銀をちりばめ色彩を施しそや、廻廊せしきまま
なく厚く雅致極なり 本社は御社の列に雄略天皇十
年創建にして日本武斗を名素尊鳴尊を合祀す境内には先
杉樹鬱然として茂生し嵐が平雲を空に疎疎と金碧と相
映射し森肅な壯麗の氣あり ぬ社前に古櫻有り金櫻なる

即ち社より西に下りては社の本社に於て金峰山山頂巨岩の下
にうらやまの途上風景殊に奇絶なりし間、**遊心**の如く
起りしれども若物は先き書く甲村旅店に宿し置きて反は持た
ざるの金まきし少し故に萬事の都合何しと面白がるまじと思
へ田舎を期する也

村内八家あり年々一前一村集りて鳥有となりし故に
建の家多し水田山は多あり田里汗みして後堀し来り細子
家を作りて甲斐の水田といはれ名々る各産するが此地の産
を以て冠するも此山は流弊一山なるは佳良の地なりと存せ
る

一旅所より午後より少許休家時次より又出て同道有り
少許して先の道にならず高きに今度見て道なきをこの因も路
を尋

夕暮の空の色は艶やかに流るる山の流れも赤い山影の青
帯は白く静寂の動もはむかへる色と見れば
とに路なきを尋ねては空に唯は徳鬼王に勝るなりしが
れ許なり少許も道なき所の和由欲も来り是より甲村に
入り旅宿あり

昇山峡の隙一見す所溪中有探奇絶妙絶望の想縁の外
にけし佳景ぞ穴なきれば溪流餘りに幅せましく山は皆崖

すむが奥を先をひしはがりて近くはたに窮感征迫の個のみ
にこそすれ規模小なりはむかへるは是れ此勝景をいひ
吾もは思ふ近きれもいひて要すとい一石末永皆其
妙を豊富に獨り此境の絶えたるを得て煙霞仔細の泉石
の異明せしは地所の能く及ぶをいひて人余りて耶馬の曠野
たるも少く然れども美なるは少くし本を要せしは地年西遊
こそ身宛し其景をいひ比較すも其れを誰やら言ひし人物の評論
は古今東西の所々を解し又と道徳をいひて今こそ南め能く風景
の比較は宇内五九州所々をいひたるは地を難くするは真に
理の正しきものにして一般に言ふは善くは悪くは悪くは善く

すれば身走りぬく個の同は是非善悪のけしが正しくけむ
はげに鶴脛の長きみ見脚の短きも笑ふの愚る均しく
大方の朝を受けむのみ

至國中今日の御旨を以て予答て樂しむ樂しむ心を大
明の中堅世化の秘奥も冬遠し此の神靈の存在を認む
る者實に境を於て未だ此外に他に求め見を所は凡山依
水のみ忠愛に今は是を以て作は非ざるを悟れりと主人此の奇
なるや一語一語に語無して去る

はとて諸書を調した青山述夫の大州流記に此の記あり又その
齊記にりし水品流記水品山より於すればはかきりし日石の者予に
何れもあつてはしむる故に於て考へしに之を以ては棟梁の必や山といふ
にと稱するがごとしむしに昔の野史を以てしむる故にあらんとす共と此を以て
記す

九、風流使者の跡

徳翁が風流使者を以て轅中に馳せ過し一巻の奇文の淑靈の
氣を程々と跡のたつしく覺へ月十八日甲村を由る東相に
上は東都より三千里世同奇蹟多し使者記の以て新證を以て知
れしむる

甲村四里陸路驛より甲辰の時近藤勇王師に抗戦せし時
公別々見を以てなす漸行せば駒飼村より三千里に春
山を遠く

おとす跡に遠く進ば程なく篠子館を以てて
山を流れがそのまにして未だ旧も復さず電信柱も流れぬ杉

の集を以て備しと數十味のみを以て流しあてり石礫岩
石を以て除けぬは崩れし道に横けり田系^せり荒涼凄
涼の有様やに心傷しと或監縛つけと老嫗の木蔭にむし
とてたゞらぶが死がら鄭俠流民圖^中のみに似り満山樹
木稀疎と野鳥書^三帝の時に帝血一聲^二張昂^一に似
る間々み山路曲折と羊腸馬背の嶮なるに具午の日影は空
端よりと影を射り流汗流る雨の心漸くして夜をも極めし下
りて茅草の茎上間と近日鐵路を設け峠中に通せしむるよな
るか此嶮嶮を通るには數十個の隊通を要するとも猶ほ函根^二推氷
の如きなり

山^下行^上の路^下家^上の前^下湖^上流^下りて小きき水車を備へ家^中
の園を煮^く此^のも糸^を繰^る又^はこ機^の聲^をり^は響^かす
て三三歳より坐^りて授^けてやりて織^るあるが此^は是^は特^に例^の甲
斐^の洞^の産^物な^らば^なら^ず

路^の左^は桂^川の流^り此^は山^中河^の三^湖の^水の決^{して}出^る流^れ集
る^に似^て相^標馬^の川^の水^上な^らば横^渡の^民は結^極此^水を飲
む^に似^てお^しも冬^は横^渡に^似て此^川の^水は飲^み飽^かす^に
桂^川の^左岸^に一^岩峰^は高^く十^年に^一度^は雨^が漢^を過^り一^実勢^は拔^き出^る
る^に似^てい^はれ^る西^田氏の^板持^山田^備中^居城^の地^は一^見す
る^に似^て要害^地に^似ては略^ぼす^に似^て昔^は牙^樓の^城に^似て

甘きまは^た雄偉なりけ^ん想^た像せのれ^り唯^かる^る志^山な^は
水は^之こ^の不^勝勢^は新^村の^城を^追ひ^まる^れを^去り^しに^真田^昌白
兼^負防^城を^来て^こを^ひし^に倒^二壁^一を^為す^建た^れて^遂に^は
此^まに^来る^こを^し備^中を^先に^歸し^て進^りて^龍城^の備^など
を^自ら^後より^進む^行き^て駒^飼何^りに^来り^しに^織田^氏の^追兵^後
に^迫り^備中^は已^に織^田に^随ひ^しり^て進^退窮^まり^し
遂^に天^目山^へと^陣没^せし^{なり}鳴^身逆^監世^主の^窮状^を
却^之を^苦し^め自^ら滴^天の^窟を^なす^窮鳥^懐手^入は^獵夫^之
を^殺す^心に^まし^て數^代相^傳の^主君^をや^あは^是に^於て^彼の^山宮^を
山^宮を^處に^て天^目山^出因^不忘^忍と^言ひ^しに^回顧^する^に數^回
云々

木^有村^又に^いは^毎川^桂川^と合^し丁^字形^をな^す爰^に橋^何り
長^き三^十余^間洋^風の^木橋^{なり}近^傍稍^平衍^にし^て鴨^島自^來快
陽^西に^照る^微光^を山^殿殿^山頂^に發^せり^俣公^のは^木橋^流理^士峰
云々

此^方少^しと^は猿^橋より^桂川^に流^れ此^地を^來り^て輜^重を^穿し^西山^岸
高^く相^迫り^し新^村の^壁立^し水^向ま^で十^余丈^にし^て水^底ま^で更^に十^余
丈^{あり}と^は水^勢緩^慢なる^が聽^けし^も聲^{なき}に^似り^不を^後
水^向に^流れ^聲を^聞か^まに^はは^回字^を全^く噴^得ぬ^には^いふ^が
少^しと^は橋^なら^しも^今に^在る^に確^に唱^へ得^なり^橋の^橋
送^は世^を知^すが^如の^白猿^の來^りて^加せ^しなり^と云^ふ是^れ

名を起りし知り、驛所、猿橋所なるがれは音読して橋の別つ
此日は心友と初せしむるし、旅宿混雑せし故泊るを増す更
の敷里行きて夜十時迄に梁川村を以てより道傍の孤屋に
投し田舎酒敷本倒し夜水を飲まず
翌日又此路は概ね桂川の沿岸に行き、屋上を行き迂曲して
新道廻りに折れ、必驛所、りて是るものなく正午次第佛岩
のかりしが新道行は四十八盤所の苦もなき車も通ら程は
家世越えし谷の下りとなり、高碓山の上り道行り、標河れば所
~~標河~~標河を敷押し分け流し、は橋も又だ登り、心所、程な
くはつて

山頂の景、主院は洞殿、蒲酒より金碧丹青の美なる彫刻
彩色もさかやくなり、此の坊は唐にして信者如初に便す山
中蛇蔵、龍窟、龍窟、蛇蔵は此の地より勢や、池もまた
白く、は所、此の地は高天、はり、の、こ、ま、た、こ、ぬ、小、溪、なるが狂
人を療治するの特効有り、と傳し、金河、此と相泊する多くの狂人
あり、當り、為、三、溪、の、高、碓、山、記、を、讀、み、し、に、坂、路、の、念、は、し、ま、を
形、実、と、し、前、者、は、後、者、の、發、を、踏、む、と、い、ひ、又、此、地、巴、龍、と、事、り、て
瀑、聲、の、輕、輕、と、し、人、語、を、聽、き、し、分、け、ば、な、記、し、り、し、か、目、ら、實、
境、と、事、り、し、見、て、世、と、し、三、溪、大、事、な、る、な、る、と、覺、り、ぬ、法、理、也、と、
人、或、は、す、と、取、り、直、ま、ず、詐、偽、を、果、する、と、禁、ま、す、と、知、ぬ、
今、は、世、の、變、者、と、見、れ、ま、す、御、心、
十、八、の、山、記、

高尾山を下りて街道に出たに夕暮り遂に大急ぎで出て
漸く金子の町は北に東に日色をくれを腹空しくなりた
鍋 鍋屋を待つことかたじけなく待たし主我家は又帳はた
くし宿も(其)には較し宿は貧乏に然る人何れば能く振
に言ひ脱けすればよきに思ふにのみうまかればねるからいふせ
心には涙を布かぬ雨の降りとたりし又一走り所の半ほどに
至りて急ぎ宿にたまり

明日は又程つげ山は流打ち後十二里を駈せ午後三時
頃に東へ今此の月二十日なり直に鞍馬家を宿に夜酒を酌み
酔酔番俵翁歸館のたか一冷し安くと眠りしつゝぬ

十 浅間

糸帯より浅間音の同坂の向を往還するに数回九月の
となれば又浅間の宿にこの宿は野木の子と打連せ若金
別杖年より難く荷物少携へ浅間を歩もり七月のたす
ふは仙居に在る此の宿より浅間の坂よりふりて東に
ふらふらと甘くいふこと

夜明けぬれば高尾山を越しこゝろ大急ぎで投し滞留回浪浪
千里水と征衣の塵を洗ひて数日の浅間を消し十日を以て
又山を下り

此旅中は鞍馬回長途旅行とし居にうろくの経験を得脚力

きん試みつ時に他日更に大なる爲す能はらむとすなり。

一月に渡りたるなり。

試み事なり清き日 （鬼も同） 此のちのちの格考ををしり

しきり ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 母は ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の ~~しきり~~ 旅の

る軍夫を物色一見大方の見事すなわが修りに似たりは
友とらたえの毒を思ひよばその様子をば相おれ人批
置す友の財布を転がして物は無一文にて仙臺を
この情なき
けり一番流をに仙臺の南上りし者おれに
多しと相馬の村をむかひたるやせし
たきり終らぬはありと決り
少総一と午飯をすし
は四をば方せと坂床と
まゝにばつとるべきまづらそ二
○

一白舟 船雲陸雨

明治五年四月行軍の擧げり十日を以て渡り重岩沼に宿し
明け雨申阿武隈川を渡り巨理を過り坂元村に宿し
二日付古天宮に朝飯を食ひ同江杉林間を行き三重駒ヶ峰村

いかり
駒ヶ峰村
仙臺
九村の北端
所と文餘の神り
字を刻し裏面には表
下の

書也舊以潘有志諸士相議樹此碑以大王有舊誼請其
 親書以銘其魂死者有知亦將感泣於地下也明以千音青
 首仙臺潘知事從左伯爵伊達宗基其の在り其後
 以文而碑其の在り青苔を掩ひ誰進めむ梅花既に枯れ
 此の碑より近き松十は仙仙の潘生百七十人三層の石塔
 其傍植有る勁節の松樹を以て之を授りし境域極々
 瀟洒なり衆多の墓集り碑向を打ちて十當時を追憶し
 感慨甚多乎腰下の劔を撫し紅霞する者情久し偶々日暮の
 村の路邊を來り余等の戎装するを見顔に敬波を
 世に心は感觸せしむるあり而して遂に忍び難しや

以て方々
 原を在り
 文字他確
 此の碑より
 其の在り

何れに今年等と歴々日來ん壯我曹乳餘の老成諸
 子凛々たる姿を見轉々今昔の感なき能はず歎はは
 當時世況を以て諸子も聽中に意なきや衆大を悦
 ば皆其傍に集り老人一咳朴訥なる奥州談を以て
 結句に我の領地も仙臺極南の領地にして一細流を
 以て相馬領に接し二藩素より相界り遠く貞心の峯
 こそ常々相互目し相馬領の樹枝は此日此向を以て仙臺を
 拒むる途程なり維新の時山相西藩合位の物有り而
 彼の形蹟疑なきこととて是を仙臺別けの岳の中村に於
 て老を撤回し聊か痛みの所なり

此の碑より
 其の在り

相漢盟

相漢盟は昔々鋒を遂に東寇方駒谷の地山を有に
海を和へ軍を要衝必争の地仙兵を守を失はむか
官上長驅国道の大軍を命直に仙堡を衝し誠易に
其戦慶應四年月一日始り勝敗決せざる者数日戦
度二天を蔽ひ叫喊地を撼かし砲聲殷々山を震ふ
して官軍軍加はれ仙堡は後援なく枯城は見れば倒れ
敵聲北に響き傷者猶且して銃を手にし八月
一日官軍大軍潮が来り迫り仙兵力盡す支那
能はず勢必退き駒谷の金湯遂に陥り朝官軍の手中
に落ちし事なり

城は甚

漢此日山兵の殫と者十軍百千人古村村民皆亂山
河に遊び死に狼藉満座填の身首断絶し屍を
垂棄してを葬者なく狼狗鷄巢猶ほ其肉を飽す又
能みまにまかり廿夜奇仙堡に村民皆出に歸り
に及ぶ血腥腥向をり或は一飲を松陰に得或は敗
を漢湖に捨て羊も七百人残軀を集めて漢軍に
大城を築きし事なり此城は漢軍に在り左方の
一丘を指して曰く言一樹の如きなく巖之城といふ山背の
露を以て則ち常時駒谷の守将宮内飛摩又城は
頼も者比威動し語る事なく老翁が討て三三仙堡に
其城は漢軍に在り

関河谷
多し
日妙なる者

相馬の事
宇内
松川

相馬の城跡を自りて者數十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者數十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり

相馬

相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり
相馬の城跡を自りて者数十人執るる事あり

水は澄深きこと清かに鴨頭、緑をなせり。園中夫即
ち四葉丸の所に相馬神社有り。舊侯の祖を祭る
は此の産物は例の相馬焼を最なり。甘食粗粒にして自
ら雅教有り。冬走馬を畫き、鬼皮ひ法橋の印を銘し、其
の有無を以て真偽を判定す。

人情輕微とて旅旅の待遇など、特右右行面なり。又其
風俗の淫佚なるに、俚歌を以て、^{見ゆ}新聲の淫雅
と譽ふは事遠きなり。
相馬よ、いと女の夜這ひは、極樂おこまらよ。

三松川浦

相馬より二里半の河原にあり 北は尾瀬より南は盛岡
連り長汀曲浦深し陸に下りて風光殊に可絶なり
甘藷畑にして金糸を一畔半の捲き知る鷲の尾崎と
以猶ほ富士の松島を控ふる如し予相馬より三里半
こたへて控ふる三三の回を共み多行して此の如し
鷲の尾崎は浦に降りて赤石の岬を以て海津深瀬に似
たりと云ふ一帯表は赤石も岬も同して階を造る如
十段之を登れば岬の西腹に夕顔の堂あり此の岬
より眺むれば一幅の活畫眼前に同く右は遠く

所記

連山の雲色霞を以て左には近く太平洋の砂浜
の波眼前には幾多の小島星散基布し此の浦の水
は張碧鏡の如し波は島影を相映し折る
岸の松林は影暗く漁歌を以て松風を以て御着
波り船はあはれなり
岬の西の岬を放ば金糸松島控廻り無間にて陸
に折り隔浦の人家より上りて標の控廻り夕陽を以て
おは映風暮霞の如し西施の姫を以て帯の袖捲
き
古山延子の大洲池を以て松島を以て之を復し九鼎大

此の山は... 松島の景... 余は世々の真意をこの松島をこふ果して... 見ると十分満足を表しぬ

明の... 旗老峠打... へ...

四 阿武隈山の船橋

十曾朝... 舟は... 鐵網...

普通の橋... 舟は... 鐵網... 舟は...

海軍を歸の幸ぬる 船重陸兩より旅色黒く
りて恙なきこ 城の申より 目出なり 此行は
小学校を教へ 守り 軍に氣を鼓舞す 事多
かるべし

明日は春期は書かん 将に此游の途より

雪汁記行

四月廿五日友人常任保平と共々夜し山形へ向て夜半至
り同遊者十餘人を相會せし其内の四五人(此皆茶丸屋中川
島不同島は余等も終始借まじりて約し此自撰本
並に初十

一 關山越

十日朝未日雪りし其意をたてて旅舎を出て行に
道此雪の深解せし為め非常上悪く行に里余まで
嵐風甚し雨を吹く面々觸れ眼鏡は曇りて明
氣屬峰重懸の如く動てたまし可飽しは山方禁

回廊のなみ 溪流は涼華をこけ 処こし 飛泉を懸く所
消鳳の四十八景是なり

出窓深く 溪懸感 岫崖懸崖 所嫌す 岩
榎路を 女求之行に 雨は 暮は 烈しく 洋華を 合
向なれば 防が せよ なる 衣襟 還透け 肌膚 粟を生
す 汗なり

此と 谷河 近くに 積雪 念ほ 堆積 僅し 狭路
を通す みに 隆道 所 長凡と 百歩 同車 踏す 亦も
途が 西の 光線を 望み 行くに 中々 書かず 内部は
溟漠 一歩し 進み 難く 暗黒 一し 所 入を 解す 時は

是吉 解の 所 ならば 富平の 出水 雨の 如くに 降り
流 潭 深く 照を 没す 河 中央 陸 河の 境界 予
洞 ちよ ば 山 勢 漸く 靡け 千里 空間の 新天地 同車
要方 洞内 の 山 奔水 を 照す 曝す 風 皇 雄壯 神思
寤 然と して 飛錫 登仙 思は けり 山 絶壁 の 長松 崖を
洞 飲み 吐れ 水 さらぬ 残雪 の 一片 危む かり けり
奇 詠なり

閑山 歸乎 主と 雨 情を 吐れ むし 日 光 微し 薄れ
黒土の上 白く 煙の 這ひ きて 危む 迷ふ さま なく
奇 詠なり

此在天童山頂に宿し舞鶴山上に真天の碑を見し明水は
十七日三重を歩きて山寺を過ぎ

三、山寺

寶珠山と名寺と稱し山寺村は山寺より國內名
指の靈利にして縁起頗る長し
山は皆奇石怪岩累々として重疊し磴道好禁
毀堂も總として山腹に點在し新産絶壁の樹年々難
き處には鐵鎖の設けり山寺の世々傳はるに此等
の尖石の故たし或は上野の樺名山と傳はるに
然るを見ればはなま異にして其味すに二三と云ふ

9.

第一の氣合はぬは山全體が先ま成るに何れかして
此の山越えても其又女岩と名へて頂上丸く山
こゝに奇峰跌宕、活潑と之に其色なほ面白
からば白みかたりと云ふ其形は種々異形をなすが
此は仔細の如し

此山形は油い明くれば米澤まで行く赤湯より大
折し地藏の林に蝦夷穴の古址を見

三、蝦夷穴の古址

地蔵が本林まで鬼の鬚の色が赤松の林にさる大木林
早にけり昔は百年しけりし由なるが今は僅十三間と
存すも其中には真中の一月特に完全なり捕獲は
同子として夏す所左よりと穴を穿ちしには何れも不豊
て左下の壁と上の土を以て散りしものに似
宿^{（高木山に似し）}は三十三に具行は欠位しけり此は突
り眠りしつらむむ甘けは不なむを以て臨むにさるし
心し昔より此林中に土塚あり一甕ありて其
土地の形勢と碑歴史をも考酌するに實に
さるし但し今は其に似るが又替り

今此処を尋ね、誤り路を失ひ一人を擇^{（た）}りて其
り行きて同けりやい人の村男を還り仔狎^{（わ）}り室内に突
れり、漸くに具終ると情に最終の者を見むとするに
の村男消防用のヘキを鎌もろり木桶もあざつ竹箒を携
へ走り来たり各人疑髪を掃きけり難髪及する安親甚
奇余等も怖む彼等曰く今日には即ち此に村内の景
象より驚きし語り大に敵^{（た）}敵^{（た）}も強者利酒癖と此
は何れ歎は忍ぶ一杯を酌つる余等躊躇決せず彼
等戯れを決して毒等い必ず強一杯を傾けおとさ
に遂に其毒を一杯に傾けしに彼等にて更に

杯を以て蝦夷の神に酌せしめて漫々と杯中の酒を地に瀉し、同じく同量に於て其桶に漫々としは、實に酒にして、此輩の物は味薄と生れ、是に於ては、彼等又曰く、
願くは此の酒桶なきを別々に臨み謝禮として僅すの金を與ふ、彼等の言ひ知る可き也

嗚呼純朴質着の田舎人、汝を杯酒飲酌せし時、
實に此行の第一快事と云はれ

此は米澤より初十街上、積雪累々、明くは十九日東
白し三四里にして粟子嶺と云はる

四、粟子嶺

嶺に於て登行の路、人々如く同志を人々に電
信柱の傍を行はば、よもや真遠なる此行に之評り定
に後れし故、是を知らせしむるも、路の真中に枯木の枝を以て
琴をなし、切て漸々登るに、雪は第一深く、眩を以て傍に
は、鬼など三三跡のみ、けりて人跡地に絶へり、訝らしと思ひたふ
しなほとせむに日光輝として、照り流り、枯樹林中、細鳥
啼き、自ら春を告むに似る、白雲のたふし、心慰め
る、
ふ、
峰の上より雪たふしのまろび下り、
を、
連しく、
覚へし
が

漸く人跡は道となりぬれば空に^{先に}遠く二の待ち待はる
り^し牙の同様に故よりまゝに路に人と遇ひ雪の上より
近道と殺られし事なり此處に共笑ふとやみぬ

萬世大路の隧道の前より一茅屋にありぬ松大蔵本を
買ふ價を二錢五厘其構造は長さ三尺餘の細竹の先
端に破布をまきあて付け石油を浸潤せしめし者時に
洞にあまきす所と天碑あり其過半は雪より埋
りし字を讀む能はぬ

收に明治碑文集なる者を見しに其中に収めて有り里
野成齋翁の撰しし者建の數千言一時の巨制歎ばし

洞中は暗黑夜の如く咫尺を辨せず轆轤にして迂曲し欲
く微光を見ず其構造の偉大なる比類なしと云ふも不可
なる一長き所二回全く過るに殆ど十二分を費す
けり先き雪深く皆より阪たんにに例の信田士走りの寸
法を借用し此の如く産など馳せ行ふに失脚顛倒
すも毫も痛みを覚えず且其速なる最速なり
山嶺をれば寒村有り家と離居の梅花白のこしと西三點
止る言れ

峠越せば茅屋有りて梅咲きぬ

やでしこころはむろして四里許り一氣に走り福島に大北は見

濃春や采花畦に満ち櫻花如姫ひ啼く鶯も忍ぶ
蝶も彌生の光うららかにこのどけしや
此は福島に宿しお同嶺幸ひと詠ふ

去、信妻文字摺

明は二十日艶なき宮の日の光うららかに宿をまき先
の信妻山にさる昔はけり湖の水こころ幡太郎義家成
馬上湖を隔て信妻山の黒河神社を拜みしとひひしは
と水と海ありと名敷のほかにいふ事と真か偽か

山は福島町此方半里あり平原の上に堆り土隆起し茂松
森鬱蒼然陰滴のふく山は底こころ且こ可相なし雖も古来著

名の勝地今は園あり山上神祠あり松園又も榎も
櫻樹を吟し皆枯る樹叶に爛々燦々霞を吐き露を
夜はす射して阿武隈の清流を眺むる福島所の瓦甍一年の
中と摺り結ぶの采花は満畦を金布けり山上酒樓茶
所けりて相違ふ者治游の好徒ならぬは甘し
山をり阿水を後り凡そ一里半文字摺不夏夏一個大
の顔不仕たきして跡に四邊は柵と環宇中古けり四季
の花を載せ其上を布きけり朝暮をせしとけり其花摺様
とむかしゆすまきり遂に此名を言はせしにまゝ而しては左
大臣の御心せたり哉なるもの歌言も今も常久し侍に

亦此歌を刻せし碑に

桑折舟を無能舟に泔蔭、松を冬に諸枝延びて地を
もたし十畝の清陰青を日有く而かし織塵たゞ日梅枝株
傍にけり蒲西極りたり

六、温泉記

道遠くして日晏れ易きまに温泉に参るに決し但事場
下より待て回冬く事付近くと力参りて物日不達せ
は正に五町歩をすく鐘を白ひ村筋遠ひ高道は松
く道くと轆をこ断然を降りて行くと不測には山越ゆ
山を憚りたは4町の深谷に臨み漸くして日全没し四圍暗

黒きり途が山家の火を理み微かに其聲、新統せをす
くみ天地寂冥然冥禁し難し

二里餘して釜先温泉に達し燈光の輝く山路の寂しき一
洗す而して浴場は唯一として大に浴一層を設けて泉原より湯
き来り其湯は効驗著しや同けり泥色の湯またたけたり
みに女なる齋藤の三を病み根元と云き来りし由なるに同く尋
ぬるに古方癒へて昨日立止かりしよし聞き遺憾限りなし
明ければ三日噴色濛々として雨ふるけしきなるに出發の先
後兵を修り此謂石園なる者を見る二の山亭を設け此に椅子
を置けり地面には芝をしい樹木花卉甚しく人為の巧を凝らし

に見ると言ふ者なく、五狗角力取場などは道芝の雨深くして行き得
ぬ。一聞くと早もつらなれども所も思ふば残るも思ふは切行
ふに雨降りて来る

歩むに、彌次郎と名産の引物細工を製法造する。一家凡そ千
軒許なる村を過ると先の方は山路敷條よふ小何れに太
きかたつて、何れも村男村女の間ふと敷回縁へ七日原へ出づ
る少は敷里へ長きより天を乱訪朝かれば、松樹山金華を、行
條の中へ遠見する。すむれし面白き女の由なるが雨深く降り
し。一瀧雲日暮として、咫尺を辨ず、衣襟志く、瀧肌雷月
冷も覺へ、苦しき言はむ方なきに、而かも一景の見て、心慰むまなし

勇を教して進み遂に河の激す所へ至り、梧の液をなまに田
窮し、傍なる灰境小倉の人々、女を雨を避け、振飯かり、行進
の方法を備へ、是非なく、少しも歸り、案内を法ふに決し、歸
ること半里餘、一村男に逢ひ、道すれ、道すれ、行くと其路は
外もなく、佳彼の山を徒後し、細路を尋ねて行ふ、其村合同、
此を安むと三度迄、飯の次第は旅行中、有り勝なり
二時遠刈田に着し、常々なるを、温泉を見、過り、其根と泉
に衣袂、温ふと益甚しく、且つ草鞋、全く切れ、も購ふま
たなれば、跋足して、歩み羊を自見、漸くして、四時、近き、其
根と着し、例の不忘、閑と投す

衣物借りて着用し、繻緯もど紋入りたてを盡くぬき、推て
火に何と乾かし、湯は透明にして赤く毛髪を辨せし、曾好のこ
思ひまゝに又なつかし

明のこむ二十日朝来、大浴敷回書、食をとり、午後、可成り出
て、所崎より、間道を取り、秋保に向ふ。此日、天氣快晴なり、
山中、所々山櫻、鈍なる木蓮の、存するに、一両株、散在して、
ひまけり、の、歌ふ、其鳥の、よの、たひ、し、
但し、道は、大方、焼野、平に、
なり、彩り、の、蚊の、足り、下を、まゝ、と、多、く、な、る、其、痛、く、嫌、ぶ、物、に、
し、何、れ、ば、怒、ら、し、く、な、ま、は、し、

かゝる長谷村の邊に、既に、黄昏なれば、大浴は、近し、と、聞、こ
得行かれ、途、に、秋保、より、宿、す、こ、も、温、泉、何、り、
其、處、に、
い、地、を、公、規、狭、く、し、て、肝、腎、の、湯、と、美、く、な、れ、

七、馬場大瀑

二十三日、舟、に、宿、も、あ、て、間、道、を、敷、へ、れ、田、舎、大、木、に、入、れ、
畦、道、傳、ひ、り、り、川、を、流、り、長、谷、と、も、二、口、道、を、取、り、馬、場、驛、
と、過、き、又、山、川、打、渡、り、山、路、に、か、り、登、り、行、た、瀑、仙、音、次、と、
名、な、す、
杉、木、立、本、村、に、さ、る、不、動、堂、表、面、より、見、過、し、つ、行、た、瀑、聲、雜、
踏、を、聞、か、れ、ば、前、棘、を、排、し、こ、溪、邊、に、坐、し、し、既、に、行、き、過、す、
こ、瀑、は、途、に、下、流、し、り、ん、と、

暫時打ち棄し大疑ひ感ふに折よく一人の推丈林回より出て来
りし故可敷入流同様に彼の不動堂こそ教澤の処にこそ居るなれ
と云ふに多き事こそなり堂後の産次と云ふちこそ遠望なり

湯は高き十丈潤き三四丈雄壯偉麗東北第一の鉅款と
り蓋し振の眞白濃の養元余未だ見ざるこの妙きは五百
人より曾矣しひくもて難きこと世絶りは勝も書する者
なく大に金輩の悲むむなり

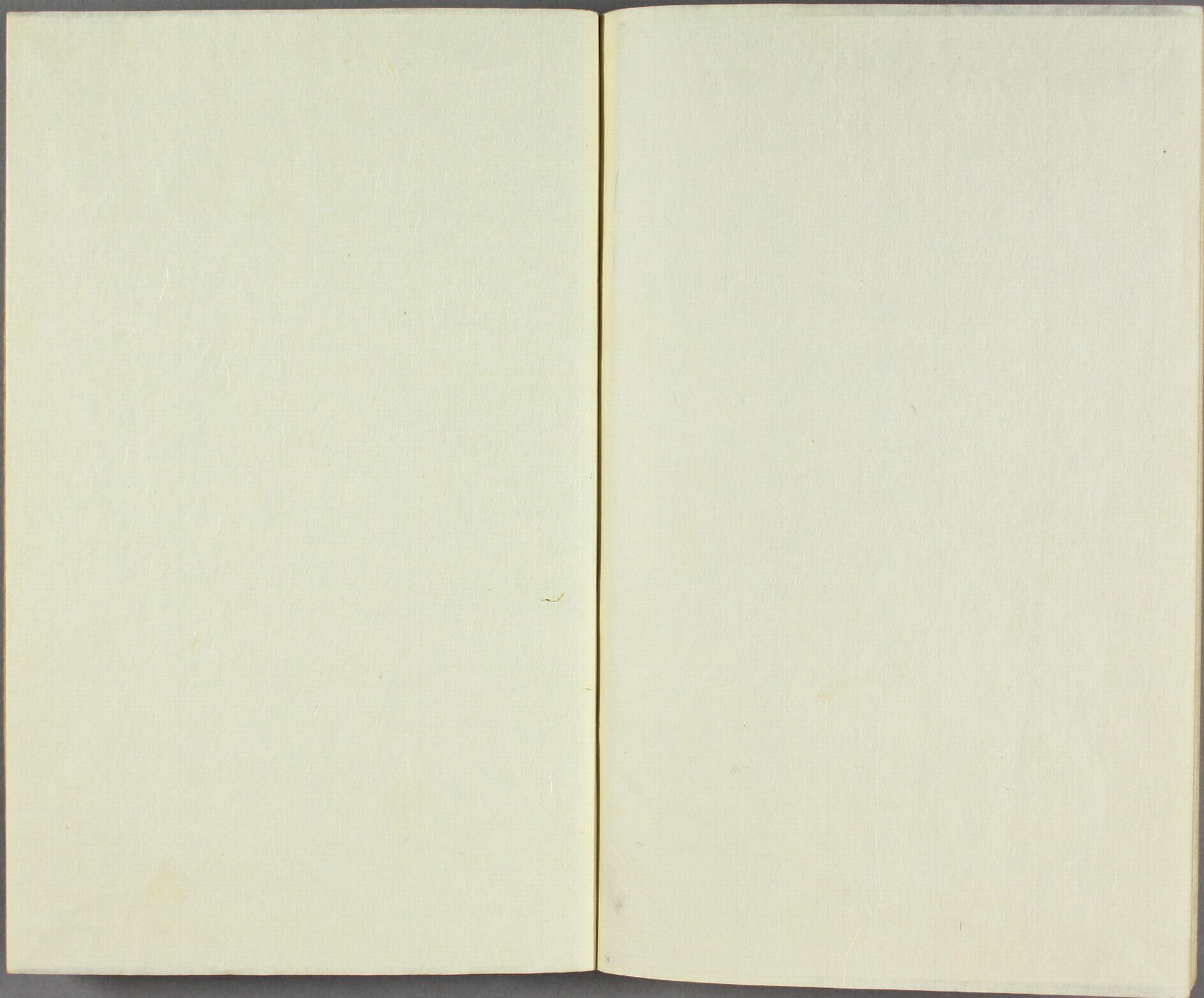
此処に彼の推丈より寺寶珠山の形が瀟灑と潮し世也
一歸りなご云々怪しく覚束なき法聞きの餘念なく見よれ
何ん此雄の二溪のたけし出す水煙の日光を介解し其者の

爲に激せれる水泡は相圓りと真綿の如く身は雪山の
頂よそを倉海の底を窺ふに似たり

當道多の措く能はず道を翻し本路を取り一雨は秋保子介
九里を去り仙臺よりかへるに日已に暮る

一行回遊中鳥不田嶋の之は飯坂より行むとて翠柳を分れ小
笠系山川の之は青根に滞在し終始漁らざるは幸々を九尾
の云々

大澤は上方より下瞰せしみにて未だ全図を畫く事となさぬ
書藏にむかひ同年九月念三日遊し深く探討し一高の漢
文紀行を草し文集の中に置く



煙霞小景の後に書す

人此一生を觀ずまゝと旅なごり小六つりしは
得^みば^ば あるいは青柳の長堤を戻り馬の鞍の上は
村はづきの小寺に山楳の真盛りなるが 霞の中は
門口は春風を煙りし行燈小暗りし木佐貝の春
の雨は聴き、峠の茶屋に三里をさよら落しし 雷の
晝を暮の暮を破らしし 小石まじりの坂路は日ざし
の声は急ぎ下りて山形の笈より夕日の葉影戦やせ

俄のよぼらりと通り過ぐる村角に早夜の袖ぬらし
あるは明けぬぬにや露路のさびしき活秋の細道をたど
りては鳴きあきる虫の音に耳をそばだて行か暮れて
土の石段の銀杏の落葉を踏みとて我影に月が
湧きあがりみ樽燃えかゆる圍爐の夜のはみに
三句は濁酒を酌みてくまき布團子と縮む心
軒の何らきの音響を隙減る風よあふさめがら
なまよ早や鷄のなきなどいづきり風流の極みなまいる

艱難と安樂は道の長短によらず運と不運は
風のむきに由り拘はらばと知るは旅と後こそなるぞし
我友久保氏青瑛は凡流の士なまを以て旅の好みし
学問の暇あむを別ち宗祇の杖の成り西行の竹立志め
つけし尋ねぬきり眺めあきし名山大川巨利旧跡
日本六千餘州廣しといふもはや尽きたりこそいふなる
近著煙霞少景をそが十六度の旅日記を輯
めたり一日来りて之を示す抱も讀むに日景

叙する精緻事を記する軽快山川草木鬚髪とて
紙上に現はる讀者をして身強心且境に在る想
阿らむまゝに希有の好旅行記なりし巻の終りよ
何なりと附くもれをと強こえはうまゝに己まが
墨まつて居るもこれに阿らねど阿や一き句一つかいつつ

五月雨や昔の旅におもひ出す

明治丙申のこゝし早苗月

出雲 大谷繞石

